

タイトル	1993年スロバキア共和国樹立後における歴史学と一般市民によるホロコーストの認識について エドゥアルド・ニジニャンスキー , カタリーナ・ボホヴァ
著者	木村, 和範; KIMURA, Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 71(2): 39-73
発行日	2023-09-30

《翻訳》

1993 年スロバキア共和国樹立後における 歴史学と一般市民による ホロコーストの認識について*

エドゥアルド・ニジニャンスキー* カタリーナ・ボホヴァ**
木 村 和 範*** (訳)

【要旨】

第1節では、ホロコーストに関するスロバキアの歴史学における最も重要な研究成果をジャンル別に概観する。ホロコーストは、1989年以前にはこの国の歴史研究では忌避されていた。ホロコーストに関するスロバキア語による文献の分析から明らかになるのは、歴史的事実としてのホロコーストが解明・確定されたことである。それは当然としても、政治目的（教育分野を含む）のための著作の頻繁な刊行を明らかにしたことは、それ以上に重要である。1989年以降に公刊されたホロコースト関係の作品を分類すれば、次のようになる。公文書のコレクション、回想録、マイノリティの視点からの分析、ホロコーストの全体像にかんする分析、侵略者にかんする分析、ホロコーストの社会的背景の分析、反ユダヤ法制的法学的分析、^{オーラル・ヒストリー}口述史料、スロバキア歴史修正主義者の登場。

次に、第2節では、(1)ヴラジミル・メチアル内閣と歴史修正主義者の

❖ 本稿 (Perceptions of the Holocaust in Slovak Historiography and among the General Public after the Establishment of the Slovak Republic in 1993) は、エラスムス・プラスからの助成を受けた研究プロジェクト「多様性の融合 — 現代ヨーロッパ・ユダヤの学際的研究とその反映 —」(United in Diversity — An interdisciplinary Study of Contemporary European Jewry and its Reflection) における成果の一部である (課題番号: UDISEJ - Erasmus + 2018-1-CZ1-KA203-O48165)。

[Erasmus+は人材養成、科学・技術分野でのEU加盟国間の人材交流協力計画の一つで、The European Community Action Scheme for the Mobility of University Studentの略称。訳文中の(補注)は訳者の照会に対する執筆者の追記、[]内は訳者による。]

* Prof. Dr. Eduard Nižňanský, Comenius University, Bratislava, Slovakia.

** Mgr. Katarína Bohová, Graduate Student, Comenius University, Bratislava, Slovakia.

*** 本学名誉教授

【謝辞】

本稿は、著書『多様性の融合 (United in Diversity)』(仮題)の中の一つの章として執筆された。この著書の出版社はベルリンのWalter de Gruyter GmbHで、現在発刊の準備中である。原著者の一人エドゥアルド・ニジニャンスキー氏の仲介により、ヨーロッパでの刊行に先立って、研究代表者J. Brach氏とWalter de Gruyter社から邦訳刊行の許諾を得た。記して深甚なる感謝の意を表す。

出版物「デュリカの歴史読本」を取り上げて、歴史学と政治との関係性を分析する。次に、(2)国民的モニュメントを作るときの歴史修正主義の影響を考察する（フェルディナンド・デュルチャンスキーの顕彰碑建立問題）。最後に(3)科学とカトリック教会による歴史解釈の狭間にある歴史学についても取り上げる（司教ヤーン・ヴォイタシュチャークの列福問題）。

キーワード：ホロコースト（Holocaust）、スロバキア共和国（1939年～1945年）（Slovak Republic (1939-1945)）、歴史学（historiography）、スロバキア（の）「歴史修正主義」（Slovak ‘revisionism’）、1993年以降のスロバキア政府による政策（Slovak policy after 1993）

はじめに — 歴史と政治の関係 —

1. スロバキアの歴史学におけるホロコースト

- (1) 公文書のコレクション
- (2) 回想録
- (3) マイノリティの視点
- (4) 侵略者
- (5) ホロコーストの社会的背景
- (6) 反ユダヤ法制の法学的分析
- (7) オーラル・ヒストリー口述史料
- (8) ホロコーストの全体像

— 歴史学者イヴァン・カメネツとラディスラフ・リプシュェル —

- (9) スロバキア歴史修正主義と国外の論調
 - (i) スロバキア歴史修正主義
 - (ii) 国外歴史文献への影響

2. 歴史学と政治

- (1) デュリカ『スロバキアとスロバキアの人々の歴史』（1995年）
- (2) デュルチャンスキーの顕彰碑建立

— 歴史修正主義者の発言と地方自治体首長の行動 —
- (3) 司教ヤーン・ヴォイタシュチャークの列福
 - (i) 国務院議員としての発言
 - (ii) アーリア化への関与
 - (iii) 列福
 - (iv) 強制移送の中止
 - (v) イクス『ピウス12世とユダヤ人』（2021年）を巡る論争

3. 結 語

参 考 文 献

はじめに —— 歴史と政治の関係 ——

歴史学と政治（あるいは国民の記憶）の相互作用は、どの国でも見られる現象である。その影響は現代史の解釈だけに留まるものではない。モニュメント、胸像、街路の名称など、国家とか国民とかのシンボルになりそうな何かを追求めることは、イデオロギーの時代（19世紀と20世紀）だけでなく、それ以前にも聖俗を問わずに行なわれた。

ことスロバキアに関して言えば、反ユダヤ主義とホロコーストの解釈、歴史学によるホロコーストの認識、ホロコーストと政治の関係などの分析は、共産主義政権の崩壊（1989年）と連動している。それまでホロコーストは、歴史学界においても社会においても（学校教育においても）、話題としては忌避されていた。共産主義の崩壊は、チェコスロバキアで新しい政治制度が形成され議会制民主主義が誕生したことを意味するだけではない。1993年には、連邦国家チェコスロバキアを解消し、その継承国家としてチェコ共和国とスロバキア共和国が分離誕生したが、思想的な空白をも生み出した。しかもその間隙は徐々にナショナリズムとキリスト教の思想で埋められるようになった⁽¹⁾。このことは、本稿の分析にとって特に重要である。戦間期まで遡及しても、基本的にはスロバキアにはリ

ベラルの伝統はなかった。1993年のスロバキア共和国成立後に、事実上のソ連依存を脱却して主権国家を形成し発展させようとしたヴラジミル・メチアル内閣⁽²⁾が社会の中に潜在するナショナリズムに白羽の矢を立てたのは、当然と言えば当然であったと言えよう。

1. スロバキアの歴史学における ホロコースト

一般的に言って1989年以前は、スロバキアの歴史学ではホロコーストは忌避されたテーマの一つであったとすることができる。ホロコーストに関するスロバキアの研究を触発した著作は、1970年代初頭にイヴァン・カメネツ⁽³⁾が執筆した博士論文であるが、単行本として出版されたのは1991年である。[以下で分野別にサーベイするが、] ホロコーストに関するスロバキア語文献を調べれば、一連の研究によって歴史的事実が発見されたことが分る。それは当然であるが、文献研究によって、政治目的（教育分野も含む）で使

(2) ヴラジミル・メチアル (Vladimír Mečiar) (1942年生)。スロバキアの政治家。1990年～1991年、1992年～1994年、1994年～1998年、首相。人民党・スロバキア民主化運動 (Ľudová Strana - Hnutie za demokratické Slovensko: HZDS) の指導者。1992年～1993年のチェコスロバキア解消のときのスロバキア側のリーダー。

(3) Ivan Kamenec, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of Tragedy,] 1991; Nina Paulovičová, „Pokus o komparáciu monografie Ivana Kamenca, *„Po stopách tragédie“* s niektorými významnými dielami o holokauste v zahraničí“, [“An Attempt to compare Ivan Kamenec’s Monograph *On the Trail of Tragedy* with some Important Works on the Holocaust abroad.”] in: Edita Ivaničková et al., *Z dejín demokratických a totalitných režimov na Slovensku a v Československu v 20. storočí*, [From the History of Democratic and Totalitarian Regimes in Slovakia and Czechoslovakia in the 20th Century,] Bratislava: HÚ SAV, 2008, pp. 18–29.

(1) Timothy Byrnes, *Transnational Catholicism in Postcommunist Europe*, Landham, Boulder, New York, Oxford: Rowman and Littlefield Publishers, 2001; Pedro Ramet, “Christianity and National Heritage among the Czechs and Slovaks,” in: Pedro Ramet, (ed.), *Religion und Nationalism in East European Politics*, Durhan/London: Duke University Press, 1989, pp. 264–285; Agáta Šústová Drellová, „Čo znamená ‚národ‘ pre katolíkov na Slovensku?“ [“What does the ‘Nation’ mean to Catholics in Slovakia?”] *Historický časopis*, Vol. 67, 2019, pp. 385–412.

用するための著作が頻繁に出版されたことも明らかになる。このことも重要な成果である。

30年に亘る研究により、スロバキアにおけるホロコーストに関する基本的事実は、国の内外の歴史学では信頼できるものとして確定され、再構成されている。しかも、年代別、地域別、テーマ別に、研究はいつそう精緻化されている⁽⁴⁾。以下では1989年以降に出版されたスロバキア史〔ホロコースト史〕関連の著作を分類する。

(1) 公文書のコレクション

ユダヤ文化博物館（ブラチスラバ）によって『スロバキアにおけるユダヤ人問題の解決（1938年～1945年）』（全5巻，1994年～2000年）が刊行された⁽⁵⁾。このコレクシ

ョンは、学術的史料の編集が基本とするべき基準を満たしていない。第1巻から第3巻までは文書の内容を誤って伝えている。収録された文書の署名に問題があるだけでなく、地方登記簿の名称、場所、項目が欠落している。

ホロコースト文書センター（ブラチスラバ）（Dokumentačné stredisko holokaustu: DSH）からの助成を受けて、ミラン・シュメチュカ財団（ブラチスラバ）（Nadácia Milana Šimečku）は、テーマ別に『スロバキアのホロコースト（Holokaust na Slovensku）』（全8巻，2001年～2008年）を刊行した^{〔訳注1〕}。本稿の執筆者の

(4) スロバキアのホロコースト史については以下を参照。Ivan Kamenec, “Phenomenon of the Holocaust in Historiography, Art and the Consciousness of Slovak Society,” in: Monika Vrzgulova and Daniela Richterová, (eds.), *Holocaust as a Historical and Moral Problem of the Past and the Present*, Bratislava: DSH, 2008, pp. 331–339; Eduard Nižňanský, “Der Holocaust in der Slowakei in der slowakischen Historiographie der neunziger Jahre“, *Bohemia*, Vol. 44, 2003, pp. 370–388; Nina Paulovičová, “The Unmasterable Past? Slovaks and the Holocaust: The Reception of the Holocaust in Post-communist Slovakia,” in: John-Paul Himka and Joanna Michlic, (eds.), *Bringing the Dark Past to Light. The Reception of the Holocaust in Post-Communist Europa*, Lincoln/London: University of Nebraska Press, 2013, pp. 549–590; Nina Paulovičová, “Mapping the Historiography of the Holocaust in Slovakia in the Past Decade (2008–2018). Focus on the Analytical Category of Victims,” *Judaica et Holocaustica*, Vol. 10/1, 2019, pp. 46–71; Tomas Sniegón, *Vanished History, The Holocaust in Czech and Slovak Historical Culture*, Berghahn Books, 2017; Miloslav Szabó, “Zwischen Geschichtswissenschaft und Wissenschaft, Der Holocaust in der slowakischen Historiographie nach 1999“, *Einsicht*, Vol. 11, 2014, pp. 16–23.

(5) *Riešenie židovskej otázky na Slovensku (1938–1945)*, [Solution of the Jewish Question in Slovakia

1938–1945,] 5 volumes, (ed. Ladislav Hubenák), Bratislava, 1994–2000.

〔訳注1〕 *Holokaust na Slovensku* [The Holocaust in Slovakia] (全8巻)の編者、タイトル、出版社、刊行年は以下のとおり。

Vol. 1: Eduard Nižňanský, (ed.), *Obdobie autonómie (6.10.1938–14.3.–1939). Dokumenty*, [Period of Autonomy (6. Oct.1938–14. Mar.1939). Documents,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2001.

Vol. 2: Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, (ed.), *Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939–1945). Dokumenty*, [President, Government, Diet and the State Council of the Slovak Republic about the Jewish Question (1939–1945). Documents,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2003.

Vol. 3: Katarína Hradská, (ed.), *Listy Gisely Fleischmannovej (1942–1944): snahy Pracovnej skupiny o záchranu slovenských a európskych židov: dokumenty*, [Letters of Gisela Fleischmann (1942–1944): Efforts of the Working Group for the Rescue of Slovak and European Jews: documents] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2003.

Vol. 4: Eduard Nižňanský, (ed.), *Dokumenty nemeckej proveniencie (1939–1945)*, [The Documents of German Origins. (1939–1945),] Bratislava: NMŠ, 2003.

Vol. 5: Eduard Nižňanský, Igor Baka, Ivan Kamenec, (ed.), *Židovské pracovné tábory a strediská na Slovensku 1938–1944. Dokumenty*, [Jewish Labor Camps and Resorts in Slovakia 1938–1944. Documents,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2004.

一人がこの8巻本の共著者であるから、ここでは論評を控え、発刊の事実を述べるに留める。ドイツで刊行された『国家社会主義のドイツによるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と虐殺(1933年～1945年)』第13巻「スロバキア、ルーマニア、ブルガリア」(2018年)は、上述の8巻本を広範囲に亘って参照し、スロバキアに関する文書の70%以上は、上記の8巻本を情報源としている⁽⁶⁾。

この他に歴史的意義があり、その上重大な政治的な意義を持つ出版物として、『バチカンとスロバキア共和国(1939年～1945年)および関連文書』(1992年)と題する作品がある⁽⁷⁾。これによってスロバキア語話者は、スロバキアにおけるユダヤ人問題の「解決」に対する教皇聖座(Sancta Sedes)の考え方を伝えるバチカンの外交文書(『第二次世界大戦に関連する教皇聖座の行為と文書(Actes et Documents du Saint Siège relatifs à la Seconde Guerre Mondiale)』(1970年～81年))を母語で読むことができるようになった。し

かし、バチカンの内部文書(たとえばスロバキアの司教がローマを訪問した際に発出された訓令など)は集録されていない。

(2) 回想録

回想録によって被害者目線の洞察が分かる。第二次世界大戦後、この種の出版は、ホロコーストを取り扱う歴史学の発展に重要な役割を果たした。その中でも注目すべきは、アルフレッド・ヴェッツラー⁽⁸⁾とルドルフ・ヴルバ⁽⁹⁾が共同で執筆した回想録である。この二人は、1944年にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所からの脱出に成功した。収容所の状況や大量殺戮に関する彼らの証言は重要な役割を果たし、『アウシュヴィッツ・レポート』(1944年)として出版された⁽¹⁰⁾。1989年以降になると、「普通の収容

(8) Alfred Wetzler, *Čo Dante nevidel*, [What Dante Did not See,] Bratislava, 1964.

(9) Rudolf Vrba, *I Cannot Forgive*, Vancouver, 1997.

(10) Ivan Kamenec, “The Escape of Rudolf Vrba and Alfréd Wetzler from Auschwitz and the Fate of Their Report,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák, (eds.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and their Efforts to inform the World on Genocide*, [Odhaľovanie Šoa: odpor a úsilie Židov informovať svet o genocide,] Bratislava: HÚ SAV, 2016, pp. 101–112. (カメネット「ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェッツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号, 2022年9月。); Eduard Nižňanský, “The History of the Escape of Arnošt Rosin and Czesław Mordowicz from the Auschwitz-Birkenau concentration Camp to Slovakia in 1944,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (eds.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and their efforts to inform the World on Genocide*, [Odhaľovanie Šoa : odpor a úsilie Židov informovať svet o genocide,] Bratislava: HÚ SAV, 2016, pp. 113–134. (ニジニャンスキー「1944年にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所からスロバキアへ脱走したアルノシュト・ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツの歴史」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号,

Vol. 6: Eduard Nižňanský, (ed.), *Deportácie v roku 1942*, [Deportations in 1942,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2005.

Vol. 7: Eduard Nižňanský, (ed.), *Vzťah slovenskej majority a židovskej minority: náčrt problému*, [The Relationship between the Slovak Majority and the Jewish Minority: an Outline of the Problem,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2005.

Vol. 8: Katarína Hradská, (ed.), *Ústredňa židov. Dokumenty (1940–1944)*, [The Jews Centre. Documents (1940–1944),] Bratislava: Klemo, 2008.

(6) Mariana Hausleitner, Souzana Hazan and Barbara Hutzelmann, (Hg.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945*, Band 13: Slowakei, Rumänien und Bulgarien, Berlin/Boston: Walter de Gruyter GmbH, 2018.

(7) Ivan Kamenec, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek, *Vatikán a Slovenská republika /1939–1945/. Dokumenty*, [Vatican and the Slovak Republic 1939–1945, Documents,] Bratislava: SAP, 1992.

者」(ヒルダ・フラボヴェツカ)⁽¹¹⁾から「それよりももっと上の収容者」(マンカ・シュヴァルボヴァ)⁽¹²⁾に至るまで、強制収容所の中で様々な階層にいた元収容者の回想録が出版された。戦時下のスロバキア共和国における政治家経験者が書いた回想録も何冊かはある。そのほとんどはホロコーストを避けているが、ユダヤ人問題の「解決」について最も多くを学ぶことができるのは、ゲイザ・メドリツキー⁽¹³⁾(経済大臣)とイムリフ・カルヴァシュ⁽¹⁴⁾(国立銀行頭取)の著作である。

(3) マイノリティの視点

1989年以降に出版されたスロバキアにおけるホロコーストに関する著作(学術文献と一般書)は、スロバキアに居住していたユダヤ人をマイノリティとして措定している⁽¹⁵⁾。その上で、国会(1939年～1945年)を牛耳っていたフリンカ・スロバキア人民党(Hlinková slovenská ľudová strana: HSLS)⁽¹⁶⁾の

指導層による反ユダヤ政策の標的になった、あの時代のユダヤ人にたいする組織的排除(市民生活、政治生活、経済生活からの排除に始まり、絶滅収容所への強制移送に至る悲劇的な結末まで)を、時間的経過の順に、あるいはテーマ別に取り上げている。多くの研究者は、被害者(ユダヤ人)

加害者(フリンカ・スロバキア人民党の支配エリート層)

物言わぬマジョリティ

という3つの主要なグループに分けて歴史を分析している。そこでは、ラウル・ヒルバークが提唱した「被害者—殺人犯—傍観者」という有名な図式が援用されている⁽¹⁷⁾。事犯に対する責任という点では、スロバキア国民は、目立たず曰く言いがたい物言わぬマジョリティとして捉えられる傾向がある。その一方で、フリンカ警固団(Hlinka Guard: HG)[フリンカ・スロバキア人民党の準軍事組織]、ドイツ党(Deutsche Partei: DP)⁽¹⁸⁾とその準軍事組織である義勇親衛隊(Freiwillige Schutzstaffeln: FS)⁽¹⁹⁾は暴力(もしくは暴力組織)に加担したマジョリティの例として挙げられ

2022年9月。

[1944年にアメリカで公刊された『アウシュヴィッツ・レポート』の邦訳は以下を参照。木村和範(訳)『アウシュヴィッツにかんする3つの供述書』『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第1号, 2022年6月。]

(11) Hilda Hrabovcová, *Ruka s vytetovaným číslem*, [Hand with a Tattooed Number,] Bratislava: Marenčin PT, 1998.

(12) Manca Schwalbová, *Vyhasnuté oči*, [Quiescent Eyes,] Bratislava, 1964.

(13) Gejza Medrický, *Minister spomína*, [The Minister's Reminiscence,] Bratislava: Litera, 1993.

(14) Imrich Karvaš, *Moje pamäti (V pazúroch Gestapa)*, [My Memories (In the Clasp of the Gestapo),] Bratislava: NKV International, 1994.

(15) スロバキアに居住していたユダヤ人、あるいはスロバキアのユダヤ人コミュニティを指しているのであって、スロバキア・ユダヤ人[スロバキア国籍を保有するユダヤ人]だけを指しているわけではない。Livia Rothkirchen, "The Situation of Jews in Slovakia between 1939 and 1945," *Jahrbuch für Antisemitismusforschung*, Vol. 7, 1998, pp. 46-71.

(16) スロバキア共和国(1939年～1945年)における唯一の合法政党。

(17) Raul Hilberg, *Perpetrators, Victims, Bystanders: The Jewish Catastrophe, 1933-1945*, New York: HarperCollins, 1992; ditto, *The Destruction of the European Jewry*, 3rd Edition, New Haven: Yale University Press, 2003. (望田幸男, 原田一美, 井上茂子(訳)『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(全2巻), 柏書房, 1997年。)

(18) ドイツ党(Deutsche Partei: DP)は、スロバキアにおけるマイノリティ・ドイツ人(東方ドイツ人(Volksdeutsche))の政党。[Volksdeutscheはナチス政権下の用語で、大ドイツ(ドイツと旧オーストリア(オストマルク))の国境外、特に東欧諸国に居住するドイツ以外の国籍を持つドイツ人。「民族ドイツ人」という訳語が当てられることもある。これに対して大ドイツの国籍を有する者を帝国ドイツ人(Reichsdeutsche)と言う。]

(19) 英語では Voluntary Protection Corps。

ることもある。ヨゼフ・ティソ (Jozef Tiso) (首相, 後にスロバキア共和国大統領), ヴォイテフ・トゥカ (Vojtech Tuka) (首相), アレクサンデル・マッハ (内務大臣) などの個人を取り上げて, その役割にフォーカスしたものもある。

マイノリティ・ユダヤ人の目線からの作品 (あるいはその影響を受けた作品) も多い。だが, 注目すべきは, 具体的なユダヤ人コミュニティに関する数多くの研究, 論文, 修士論文, 博士論文である (たとえば, ペトラ・ラリショヴァ, イゴール・バーカ, ズザナ・シェフチコヴァ, エドゥアルド・ニジニャンスキーによるブラチスラバ・ユダヤ人コミュニティの研究。エドゥアルド・ニジニャンスキー, ミハラ・ロンチコヴァによるバンスカ・ビストリツァ・ユダヤ人コミュニティの研究。バルボラ・ヤコビョーヴァ, エドゥアルド・ニジニャンスキーによるドルニー・クビン・ユダヤ人コミュニティの研究。アティラ・シモンによるダナイスカ・ストレダ・ユダヤ人コミュニティの研究。ミロスラフ・ミヒェラによるコマルノ・ユダヤ人コミュニティの研究。ヤーン・フラヴィンカによるメジラボーチェ・ユダヤ人コミュニティの研究など)。

英語で書かれた著書もある。イスラエル商工会議所は, 「失われた街」というプロジェクトの下で地域をテーマにした論文の出版を支援している。テーマ別の業績として注目すべきは, スロバキアの強制労働とユダヤ人労働収容所に関する著書である (ノヴァーキー収容所に関するイゴール・バーカの著作⁽²⁰⁾, セレージ収容所に関するヤーン・フラヴィンカとエドゥアルド・ニジニャンスキーの著作⁽²¹⁾)。

(20) Igor Baka, *Židovský tábor v Novákoch 1941–1944*, [The Jewish Camp in Novák 1941–1944,] Bratislava, 2001.

(4) 侵略者

このテーマでホロコースト歴史学の動向を十分に伝えるには, スロバキアのユダヤ人問題を「解決」するために派遣されたナチスの顧問官ディーター・ヴィスリチェニー (Dieter Wisliceny) に関するカタリーナ・フラツカ⁽²²⁾の労作を挙げておかなければならない。

(5) ホロコーストの社会的背景

社会環境 (特にマイノリティのユダヤ人とマジョリティのスロバキア人との関係) を取扱った作品が初めて登場したのは 2000 年以降のことである。それらの作品は, スロバキア経済からユダヤ人を排除した過程とそれによってもたらされた変化を描いている (アーリア化, ユダヤ人経営の事業や手工業の一掃, 強制移送など)。スロバキア人はアーリア化によってユダヤ人財産を接収し, 新たな利益を得た。それによってマジョリティ内部には階層構造の変化が生じた。そのことを取り上げた著作もある。マイノリティとマジョリティの関係を分析する場合に, その基底に据えるものとしては, ヒルバーグの分類よりも階層構造の変化のほうが適切であるように思われる。ユダヤ人が経済的, 社会的生活や専門的職業の分野から排除された後に, 実際にその後釜に座ったのは, マジョリティのスロバキア人の中で, どのようなグループであったかを正確に特定することも必要である。この問題は, 中産階級の形成という新たなテーマと結びついている。スロバキア・ユダヤ人は, その経済的・社会的地位から見ても, 専

(21) Ján Hlavinka and Eduard Nižňanský, *Pracovný a koncentračný tábor v Sereďi 1941–1945*. [The Labour and Concentration Camp in Sereď 1941–1945,] Bratislava, 2009.

(22) Katarína Hradská, *Pripad Wisliceny. Nacistickí poradcovia a židovská otázka na Slovensku*, [The Wisliceny Case: Nazi Advisors and the Jewish Question in Slovakia,] Bratislava: AEPress, 1999.

門的職業従事者の多さから見ても、中産階級の典型であったからである。[ユダヤ人財産を収奪したり、専門的職業の分野からユダヤ人を排斥したりすることによって、かつてのユダヤ人の座に着いた]新しい中産階級は、唯一の合法政党であったフリンカ・スロバキア人民党からの支援や政権とのコネのおかげで、その地位に有り付けたのであるから、この分析は必然的に政治の領域に入ってゆくことになる。したがって、[ドイツから]現地に入り込んできた侵略者や地元にいる加害者（主として行政機関やフリンカ警固団を含む党組織に所属していた下級の者）にはもっと注意を払う必要がある。政治的なコネを利用しうまく立ち回って、ユダヤ人から富と財産を剥奪した地元グループの上昇志向は、検証可能である⁽²³⁾。このような研究から分かったのは、具体的に市や町を特定しそれに焦点を当てた地域分析が最善だということである。

(6) 反ユダヤ法制の法学的分析

このテーマの下で数冊の著書を著した法律分野の歴史学者（カタリーナ・ザヴァツカ（Katarína Zavacká）、ラディスラフ・フベナーク（Ladislav Hubenák）など）は、本書で別の章を執筆している。この分野の著作は1960年代にはすでに出版されている。

オーラル・ヒストリー (7) 口述史料

ホロコーストに関する研究は歴史学者だけでなく、ペーテル・サルネル（Peter Salner）、モニカ・ヴルズグロヴァ（Monika Vrzgulová）などの民族学者によっても行われている。イエール大学の協賛によりミラン・シュメ

チュカ財団は、約150人のホロコースト犠牲者からの聞き取り調査を行った。ホロコースト博物館（セレヅ）やスロバキア国民蜂起博物館（バンスカ・ビストリツァ）も同様の取り組みを行っていて、注目に値する。

(8) ホロコーストの全体像

— 歴史学者イヴァン・カメネツと ラディスラフ・リプシュル —

これまでのところ、スロバキアの反ユダヤ政策とホロコーストの全体像を捉えようとした業績は、わずかしかない。

スロバキアにおけるユダヤ人の迫害と排除に関心を持っていたイヴァン・カメネツは、1960年代以降のスロバキア歴史学においては孤高の人であった。彼の代表作である『悲劇の軌跡（*Po Stopách Tragédie*）』は、今日に至るまでスロバキアにおけるホロコースト研究の泰斗である[著書として刊行されたのは1991年]。マルクス主義の影響を受けたカメネツは、ホロコーストの分析だけでなく、戦時中のスロバキア共和国も分析対象にした。カメネツは、スロバキア独自の反ユダヤ主義の問題を析出し、それが、穏健派⁽²⁴⁾によるか急進派⁽²⁵⁾によるかを問わず実施された反ユダヤ主義政策にどのような影響を与えたかを考察した。また、カメネツは、スロバキア共和国がユダヤ人を敵と定義したときにどのようにしてそうしたかを検討するとともに、当局のそのような姿勢がユダヤ人コミュニティに何をもたらしたかについても検討した。そして、戦時中のスロバキア政府による反ユダヤ主義政策の制度化とその下で実施された政策を時間的経過の順に整理し、広く全体を見通した。その上で、ユダヤ人問題の解決が穏健派と急進派という二大国内勢力による権

(23) 詳しくは以下を参照。Eduard Nižňanský and Ján Hlavinka, *Arizácie*, [The Aryanization,] Bratislava, 2010; Eduard Nižňanský and Ján Hlavinka, *Arizácie v regiónoch Slovenska*, [The Aryanization in the Regions of Slovakia,] Bratislava, 2010.

(24) たとえば、大統領ヨゼフ・ティソ。

(25) 特に首相ヴォイテフ・トゥカと内務大臣アレクサンデル・マツハ。

力闘争の一部をなしていること、その対抗を通じて両派はいずれもナチス・ドイツから支持を得て政治権力を確保しようとしたこと、を明らかにした。さらにカメネツは、戦時中のスロバキア共和国で誕生した純粋に自前のまじりけのない反ユダヤ政策と、ナチスの圧力で実行した政策（たとえば強制移送）とを区別しようとした。当然のこととは言え、当時の政治状況では、カメネツには外国の公文書館（たとえば、西ドイツ（ベルリン）外務省政治文書館（*Politisches Archiv des Auswärtiges Amt*））での調査が許されず、1989年以前には、その膨大な研究の成果は、一部しか公開できなかった。

ラディスラフ・リップシュエル（*Ladislav Lipscher*）の著書『スロバキアのユダヤ人（1939年～1945年）（*Židia v Slovenskom Štáte 1939–1945*）』（1992年）も、カメネツの場合と同じ理由でスロバキアでの出版は1989年以降になった。リップシュエルの亡命後に、この著書のドイツ語版（1980年）が出版された。スロバキアから出国してからのリップシュエルは、歴史学者としての活動を停止し、ホロコーストに関する研究をしていない。

(9) スロバキア歴史修正主義と国外の論調

(i) スロバキア歴史修正主義

ホロコーストのようなテーマでさえ、政治に利用されることがある。スロバキアが民主化された後、ナショナリストの立場に立つ歴史学者が帰国してきた。それまでは原則として、スロバキアでは歴史修正主義の著作は出版されておらず、ホロコーストがあったことを、その根本から問いただすような出版物もなかった。我々が直面した「歴史修正主義」は、歴史学界の一部による、ある種の防御反応のようなものであって、それによれば、ユダヤ人を強制移送した責任がナチス・ドイツに押しつけられたり、場合によっては急進派に属していた者（首相のトゥッカとか内相の

マツハなど）の個人責任だとされたりしている。この考え方によれば、大統領のティソは「何千もの免除措置」を發出して多数のユダヤ人を「強制移送から」救出したので、スロバキアで執行された反ユダヤ主義的政策にはまったく責任がないとされる。このような考え方を示す著作の例としては、『スロバキアの隠された真実』（1996年）という論文集^[訳注2]、ミラン・スタニスラフ・デュリカ（*Milan Stanislav Ďurica*）⁽²⁶⁾の『ヨーロッパ・ユダヤ人の悲劇におけるスロバキアの占有率（*Slovenský podiel na európskej tragédii Židov*）』（1987年）がある。デュリカは自分に都合のよい史料だけを引いて、「ユダヤ人問題の解決」の責任をナチス・ドイツに押し付け、スロバキアの閣僚のほとんど（ただしトゥッカとマツハを除く）はナチスによる圧力を受けながらもスロバキアの独立を勝ち取ったとしている。さらにデュリカは、「強制移送（*deportation*）」という言葉に「疎開（*evacuation*）」に置き換え、1942年法律第68号（憲法）を「ドイツに対する」「抵抗」の一つであったと解釈している^[訳注3]。〔憲法施行以前

[訳注2] 論文集『スロバキアの隠された真実（*Zamčená pravda o Slovensku*）』はバルティザーンスケ〔ニトラの北東 50 約 30km〕（スロバキア）のガルモンド社（*Garmond*）から1996年に刊行された。執筆者は、デュリカをはじめ、ガブリエル・ホフマン（*Gabriel Hofmann*）、フランティシェク・ヴヌク（*František Vnuk*）など多数である。執筆者の名を記載した表紙は以下を参照。Cf. <https://www.databazeknih.cz/obalka-knihy/zamcena-pravda-o-slovensku-236081>, accessed on March 14, 2023.

(26) ミラン・スタニスラフ・デュリカ（*Milan Stanislav Ďurica*）（1925年生）。スロバキアの歴史学者、神学者。アバノ・テルメ（イタリア）のサレジオ神学大学神学部教授。1993年、プラチスラバ（スロバキア）のコメニウス大学キリルとメトディウス神学部スコラ哲学教授。1997年、退職。「超国家主義者」と批判されている。

[訳注3] この見解は、大統領による移送免除措置にたいするヴァルター・ブランドミューラーの見解にも影響を与えた（次項（ii）49頁参照）。

の強制移送にも] 遡及して有効であるとし、ユダヤ人の強制移送を合法としたのは、まさにこの法律であり、しかも、この法律を根拠として、1942年3月から10月までに約5万8000人のユダヤ人が強制移送されているにもかかわらず、である。この法律は「ユダヤ人に対する迫害」[「比較的小さな悪」なるものに留めておこうとする傾向を反映したものであり、スロバキア共和国の時代にはしばしば見られた考え方である。わずかでも体面をとり繕おうとしたスロバキアの政治家たちは、この法律を採択すれば、[大統領に移送免除の発出を認めているので] スロバキアがすべてのユダヤ人を根こそぎ強制移送するようなことはしていないと言い抜けることができると考えたのである。1995年に学校の副読本として出版されたデュリカの『スロバキアとスロバキアの人々の歴史 (*Dejiny Slovenska a Slovákov*)』には、反ユダヤの感情から発せられた政治的な主張が認められる。

フランティšek・ヴヌクの考えも同様である。ヴヌクが執筆したアレクサンデル・マッハ(内務大臣)の伝記(1991年)は、反ユダヤ政策とホロコーストにわずか25頁しか割いておらず、しかも過激な反ユダヤ的な物言いをしたマッハの言説にはほとんど触れていない。1942年の強制移送については数行で済ませ、移送された人たちが何人いたかも書かれていない⁽²⁷⁾。

すでに述べたように、これらのテーマは、すべて戦時中のスロバキア共和国の政権の性格をめぐる議論だけでなく、当時の出来事に対するスロバキアの政治家の責任についてのいっそう幅広い議論とも連動している。それとの関連で言えば、前述したデュリカの1995年の副読本は、たとえ「事実とは異なる

別のこと」が起こっていたとしても、結局のところ、スロバキアの国民を救ったのは、大統領ティソをはじめとする政府や国会であろうという予防線の役割を果たしたのである。さらにまた、ボヘミア・モラヴィア保護領やポーランド[総督府]でユダヤ人が置かれた状況は、[スロバキアよりも] もっと劣悪であったことが強調されている。

(ii) 国外歴史文献への影響

スロバキア歴史修正主義が与えた国外の歴史学への影響は注目に値する。これに関しては、たとえば2003年に出版されたヴァルター・ブランドミュラー⁽²⁸⁾の著書『スロバキアにおけるホロコーストとカトリック教会』⁽²⁹⁾を取り上げなければならない。興味深いことに、ブランドミュラーはドイツの中世学者であり、バチカンとは太いパイプで結ばれた枢機卿である。この著書の引用文献目録を見ると、ブランドミュラーがスロバキア語に通じていないことは多少なりとも明らかである。エミーリア・フラボヴェツ (Emília Hrabovec) や前述のミラン・デュリカなどという相談相手が著作を厳選して読ませていることが分かる。イヴァン・カメネツ、カタリーナ・フラツカ、エドゥアルド・ニジニャンスキー、ペーテル・サルネルなどのよく知られている人たちの著作が挙げられていないのは、十中八九そのためであろう。ブランドミュラーは若干の文書を一部参照しているものの、その著書はバチカン文書の一部である『第二次世界大戦に関連する教皇聖座の行為と関連文書』(1970年～81年)⁽³⁰⁾に強く依拠している。

(28) ヴァルター・ブランドミュラー (Walter Brandmüller) (1929年生)。ドイツ・カトリック教会の高位聖職者。2010年、枢機卿。1998年～2009年、ローマ教皇庁歴史科学委員会委員長。

(29) Walter Brandmüller, *Holocaust in der Slowakei und die katholische Kirche*, Ph. C. M. Schmidt, 2003.

(27) František Vnuk, *Mať svoj štát znamená život: politická biografie Alexandra Macha*, [Having own State means Life: a Political Biography of Alexander Mach.], Bratislava: Ozveny, 1991.

なお、次のことは指摘しておかなければならない。それは、スロバキアに関する文書の一部が、イヴァン・カメネツ、ヴィリヤム・プレチャン (Viliam Prečan), スタニスラフ・シュコロヴァーネク (Stanislav Škorvánek) の手でスロバキア人向けに『バチカンとスロバキア共和国 (1939年～1945年) と関連文書 (Vatikán a Slovenská republika 1939–1945. Dokumenty)』(1992年) という資料集として初めて公刊されたが、前掲したブラントミュラーの著書『スロバキアにおけるホロコーストとカトリック教会』(2003年) では、それが参照されていないということである。さらにブラントミュラーは、[1938年9月の] ミュンヘン協定以後に変容したスロバキア政治を断片的に取り上げているだけである。ブラントミュラーのこの著書のタイトルは、スロバキア共和国の時代 (1939年～1945年) に、国会、国务院、フリンカ・スロバキア人民党などの中で政治に積極的に関与したり、フリンカ警固団の精神的支柱になったりした聖職者の人数とその役割についての情報が掲載されているのではないかと思わせる。しかし、そのようなことには言及されていない。ナチス・ドイツとスロバキアとの外交関係も分析されていない。むしろ、基本的に言って1940年まではスロバキア・ユダヤ人に関して議論に値するようなことはなかったという印象を読者に与えさせている。ブラントミュラーは、オーストリア＝ハンガリー帝国時代のユダヤ人は親ハンガリー反スロバキアであり、その後、戦間期のチェコスロバキアの時代には、スロバキア人の側ではなくてチェコのプロテスタントの側に立っていたと述べている。これは、ナショナリストの見方

である。さらにまた、スロバキアのカトリックによるユダヤ人への^{いきどお}憤りは、宗教的なものではなくて、社会的 (あるいは経済的) な動機によるものであったとも主張している。しかし、イエズス会管区長ヨゼフ・ミクシュ (Jozef Mikuš), 神学教授シュテファン・ズラトシュ (Štefan Zlatoš), 大統領ヨゼフ・ティソなどのカトリック神学者による発言の多くには、反ユダヤ主義の感情を読み取ることができる。ブラントミュラーが唯一認定しているのは、1942年の劇的な出来事 [集団的強制移送] だけである。このドイツ人枢機卿は、司教ヤーン・ヴォイタシュシャーク (Ján Vojtaššák)⁽³¹⁾ がこの年の強制移送を止めようとして発したとされる書簡を持ち出している。しかし、あの著書を読んでみても、かの司教がこの書簡を1942年に書いたのか1943年なのかは分からない。この著者は、今日に至るまで歴史学者の誰一人としてこの書簡を実際に手にした者がいないという事実、この書簡はアレクサンデル・マッハ (内務大臣) の口頭による証言にしか登場しないという事実、これらを無視している。1942年法律第68号 (憲法) に関して言えば、ブラントミュラーはデュリカの見解を借用して、この法律は、たとえば改宗者を例外適用対象者としていたように、宗教上の理由による例外適用 [強制移送免除] を認めていたので、[この憲法 (の関連条文) はドイツへの] 抵抗の所産であったと主張している。そして、1942年6月に発出したドイツ大使ハンス・エルルト・ルディン (Hanns Elard Ludin) の文書を引き、この文書の中では強制移送が停止されたと言われていると述べて、[移送の] 分析を終えている。しかし、これは誤りである。7月にはさ

(30) P. Blet, R. A. Graham, A. Martini, and B. Schneider, (eds.), *Actes et Documents du Saint Siège relatifs à la Seconde Guerre Mondiale, Ed. I-XI*, Cita del Vaticano, 1970–1981.

(31) ヤーン・ヴォイタシュシャーク (Ján Vojtaššák) (1877年～1965年)。スピシュ教区のローマ・カトリック司教。1940年～1945年、当時の国会第二院 (国务院) の副議長。

らに4本の移送列車がスロバキアを出発し、9月と10月にも移送列車が出発しているからである。プラントミュラーは、6月以降の移送列車の本数に触れていないし、強制移送の人数についても触れていない。大統領ティソはバチカンからの抗議を受けて、1942年に強制移送を中止したと述べているが、それを裏付ける文書はない。プラントミュラーは、1940年から1945年までブラチスラバに駐在したローマ教皇代理大使ジュゼッペ・ブルツィオ師(Giuseppe Burzio)が、ティソに強制移送の問題で申し入れたことを縷々説明している。さらに、1944年11月にティソがローマ教皇ピウス12世(Pope Pius XII)に宛てた書簡を仔細に分析し、その書簡ではティソは自分には責任がないとして身の証を立てようとしたと述べている。その書簡は無力で無分別、しかも皮肉癖すらあるティソが書いたものだというのが、プラントミュラーの結論である。著書の終りのほうでは、ティソを破門することが効果的な懲罰になるかどうかを考察し、中世であってもそのような懲罰では目的を達成することはできなかつただろうと言っている。中世研究家としても枢機卿としても、プラントミュラーにはその鼎の軽重が問われている。

2. 歴史学と政治

何らかの歴史解釈にお墨付き与えようとするとき、政治権力が利用されることがある。逆に政府が歴史解釈を利用して、その立場を強化しようとすることもある。国民の記憶を再構築したり学校教育に影響を与えたりしようとすることもある。以下ではそのような事例を三つ取り上げて、歴史学と政治の関係を考察する。その際、当然ながら、そのような歴史解釈が往時の政権による様々な施策へと逆戻りさせようとしていないかどうかを考えてみる。

(1) デュリカ『スロバキアとスロバキアの人々の歴史』(1995年)

ミラン・スタニスラフ・デュリカは、スロバキア歴史学の中で歴史修正主義的接近法を採る研究者の代表格である。1989年に亡命先のイタリアから帰国したキリスト教ナショナリストのデュリカは、スロバキア共和国(1939年～1945年)の歴史を再解釈しようとした。1993年にスロバキアが独立すると、その支配層は国の正統性を強固なものとする方法を模索したからであった。その過程で、歴史的なシンボル、歴史上の人物やエピソードを探し出し、それによってチェコスロバキアの解体と新生国家スロバキアの誕生を正当化しようとした。1992年の国政選挙戦では、どの政党もあからさまには独立を口にしなかったことを考えると、政府の思いはさらによく理解できよう。政府はスロバキア人が歩んできた歴史を解釈することによって、ヴラジミル・メチアル内閣と新たに生まれ変わった主権国家スロバキアを正当化しようとしたのである。「国民は昔からいるが、国は若い(Old nation — young state)」というスローガンが巷で聞かれるようになったのも、このような状況の中であった。このスローガンの意味は、ヨーロッパ史ではスロバキア人は9世紀頃から民族として存在していたが、最初の約1000年間はハンガリー人に支配され、20世紀の大半はソ連からの圧力を受けながら、チェコスロバキアに飲み込まれてチェコ人に支配されていたというように、いつも誰かに支配されていたということである。ところが、1993年にスロバキア共和国が独立すると、政治エリートたちは、独立すると決めたことの正当性を担保するためのシンボルを探すようになり、戦時下のスロバキア共和国(1939年～1945年)の歴史を解釈し直して、それを1990年代の「新生国家の」絶対的なモデルと見立てたのである。

歴史学における接近法の多様性は、一般的

に言えば、歴史に対する知識と理解を前進させるのに役立つので、それ自体が間違っているわけではない。このことは重要である。ただし、デュリカの著書には気乗りがしない。それは、解釈モデルとか方法論が異なっているからではない。彼の言説が教育の問題に直結しているからである。共産主義が崩壊した後、新しい歴史教科書を執筆する必要があることは理解できる。前政権は歴史（特に20世紀）の解釈を歪曲していたからである。ところが1993年以降になると、スロバキア政府は主としてナショナリズムのものの見方をするヴラジミール・メチアルからの影響を強く受けるようになった。それは、たとえば、国民のシンボルをめぐる論争の中に見ることができる。スロバキア人が政体を持つ国民^{ポリティカル・ネーション}になれたのは、チェコスロバキア第一共和国（1918年～1938年）が建国されたおかげである（1918年10月28日）。それにもかかわらず、この日は、スロバキアの独立記念日として制定されることはなかった。

1993年以降になるとイデオロギーの空白が次第にナショナリズムとキリスト教神学で埋められるようになった。メチアル内閣は、スロバキア国民党（*Slovenská národná strana*: SNS）との連立内閣であった。スロバキア国民党の党首エヴァ・スラヴコヴスカ⁽³²⁾は1994年から1998年までメチアル内閣で教育科学大臣を務めた。1995年、教育科学省はデュリカに委嘱して学校向けの歴史教科書の副読本を執筆させた。ここで重ねて強調しておきたいことがある。それは、前体制のイデオロギーの影響下にあるそれまでの教科書の書き直しを必要としたことが、それ自体問題だと言っているのではないということである。スロバキアが欧州連合（*European Union*: EU）

に対して徐々に門戸を開放していることを踏まえ、欧州委員会（*European Commission*）は、新しい教材の作成に助成金を交付して支援することにした。このとき PHARE 教育支援スキームが活用された^[訳注4]。

結論から言うと、『スロバキアとスロバキアの人々の歴史』（1995年）というデュリカの著書は、そのほぼすべてに問題がある。それには年表に注が付けられているが、事実が誤認され、その取り上げ方は平衡性を欠いている。史実への解釈が作為的で偏っているために、倫理の点からも問題がある。デュリカは「集団としてのスロバキア民族（*Slovak ethnic group*）」が1000年の間存在し、スロバキア国民の起源はそれだけ古いということを証明しようとしている。著書を貫いているのはそのような考え方である。反ユダヤ主義とホロコーストに関して言えば、デュリカは全体主義体制下のスロバキア共和国（1939年～1945年）を賛美するとともに、そのときの大統領であったヨゼフ・ティソのことを、キリスト教を領導したカトリック指導者として称賛している。デュリカは、反ユダヤ措置の抑圧的な性質には口をつぐみ、マイノリティのユダヤ人に対する迫害を皮肉な言葉遣いで歪曲しようとさえている。スロバキアからのユダヤ人の強制移送（前述）を実行したのはドイツ側だけだと主張するばかりか、強制移送などスロバキアで執られた反ユダヤ政策の責任をナチスに押し付けようとしている。スロバキアの政治家は「善人」で、ナチスの人物を悪党と描いている。このような

[訳注4] EUが策定した PHARE は加盟準備国への財政支援プログラム。1989年に策定されたプログラム「ポーランドとハンガリーの経済再建支援（*Poland and Hungary: Assistance for the Restructuring of the Economy*）」がその起源。Cf. “Briefing No 33: The PHARE Programme and the Enlargement of the European Union,” by European Parliament, in: https://www.europarl.europa.eu/enlargement/briefings/33a1_en.htm, accessed on March 15, 2023.

(32) エヴァ・スラヴコヴスカ（Eva Slavkovská）（1942年生）。スロバキア国民党。1994年～1998年、教育科学大臣。

偏った物言いにはいくつもの例がある。反ユダヤ法制の基礎としての人種的偏見を謳いこんだ1941年政令第198号（いわゆる「ユダヤ法」, 1941年9月9日公布）について、デュリカは、ティソがこの政令には署名していないと主張し、反抗的な態度をとった大統領が、あたかも反ユダヤ主義的な政策には賛同していなかったかのような印象操作をしようとしている。しかし、1939年憲法の下では、政令など政府が定める規程には大統領の署名は必要なく、議会の承認だけで良いとされていたことには、口をつぐんでいる。また、ティソが、1940年9月3日、1940年法律第210号（憲法）に署名したという事実を無視している。この法律は、（議会の承認ではなく）政府が定めれば、その定めによって内閣がユダヤ人政策を策定・執行しようと定めている^{〔訳注5〕}。この憲法が制定されたことによって、1941年政令第198号（ユダヤ法）が施行されたのであるから、一連の法整備に対してティソとスロバキア共和国議会の両方が政治的責任を負っているということは、そうは易々と無視できることではない。しかも、ティソは1942年5月15日付で法律第68号（憲法）に署名して、すでにその年に実行されていた強制移送を「遡及して」合法としたのである。デュリカの著書は、ティソの反ユダヤ発言にもフリンカ・スロバキア人民党のプロパガンダにも、まったく言及していない。また、ノヴァーキー、セレッジ、ビーネなどスロバキア全土に設置された労働収容所の状況についての記述では、その内容が眉唾ものと言えるような箇所もある。デュリカは、ユダヤ人収容者のほとんどが普通の生活をしていたと言っているからである。彼はまた、内務大臣アレクサンデル・マッハと首相ヴォイテフ・

トゥカによる謀議に触れて、強制収容所への移送（1942年4月開始）が「絶滅を目的とするのではなく」「家族を離ればなれにさせない」ためであったことを言外にほめかしている。

1997年の初めに、教育省は、地方事務所を通じて各小学校にデュリカの著書を配布した。この本の刊行と教育課程における使用については、基本的に全政党（スロバキア民主運動党（Hnutie za demokratické Slovensko: HZDS; Movement for a Democratic Slovakia）、スロバキ国民党、キリスト教民主運動党（Kresťanskodemokratické hnutie: KDH; Christian Democratic Movement））が支持した。公然と反対したのは、民主左翼党（Strana demokratickej ľavice: SDL）と共産党だけであった。マティツァ・スロヴェンスカ（Matica slovenská）^{〔脚注44参照〕}もこの教材の公刊と学校での使用を支持した。

スロバキア科学アカデミー歴史研究所（Institute of History of the Slovak Academy of Sciences）は、デュリカの著書を分析し、その結果を発表し^{〔33〕}、基本的な考え方の誤りと事実誤認を指摘した（これ以外の論点を批判している文献がある）。

当時スロバキアは欧州連合（European Union: EU）に加盟してはいなかったが、この教材に対してはブリュッセル〔EU〕が共同で助成金を交付していたことから、欧州議会（European Parliament: EP）の議員3人が書面で抗議した。

ヘディ・ダンコーナ^{〔34〕}の質問は以下のとおり。

〔33〕 „Kolektív Historického ústavu SAV, Stanovisko ku knihe M. S. Ďuricu: Dejiny Slovenska a Slovákov“, [“Expert opinion on the book by M. S. Ďurica: History of Slovakia and Slovaks,”] *Studia historica Nitriansia* 5, 1996, pp. 285–291.

〔34〕 ヘドヴィック（ヘディ）・ダンコーナ（Hedwig “Hedy” d’Ancona）（1937年生）。オランダ労働党の政治家。1994年～1999年、欧州議会議員。

〔訳注5〕 このように立法府がその権限を行政府に委譲（授権）する法律を授権法（Ermächtungsgesetz, Enabling Act）と言う。

貴委員会〔欧州委員会〕は、スロバキアの小学校向けの国史の教材の中に、絶滅収容所へのユダヤ人の大量移送について誤った説明があることを承知していますか⁽³⁵⁾。

レオニー・ファン・ブラーデル⁽³⁶⁾による欧州委員会への質問は以下のとおり。

スロバキアでは小学校向けの歴史書が出版されましたが、それは外国人を憎悪させることになりました。そのような見

解を記述した出版物の刊行に当たって、PHARE プログラム補助金が将来悪用されないようにするために、欧州委員会は防止策を講じましたか⁽³⁷⁾。

オトー・バルドンによる欧州委員会への質問⁽³⁸⁾は以下のとおり。

本書〔デュリカの著書〕は、先史時代からのスロバキアの歴史を基にして、近隣諸国のうち特にチェコに対しては敵対的なイメージが強い国民的神話を作り出そうするばかりか、反ユダヤ的傾向を強調していますが、貴委員会はそのことを認識していますか。改めて伺いますが、全体的に見て、国家社会主義の衛星国のティソ政権（1939年～1945年）が、好意的に記述されていることをご存知でしょうか⁽³⁹⁾。

(35) ヘディ・ダンコーナは、1997年7月10日、欧州委員会にスロバキアの学校教科書に記載された反ユダヤ主義について次のような質問状を提出した（件名：スロバキアの教材における反ユダヤ主義；質問番号：E-2343/97）。

1. 欧州委員会は、スロバキアの小学校向けのスロバキア史の教科書の中に、ユダヤ人の絶滅収容所への大量移送について説明に誤りがあることを承知していますか。2. 欧州委員会は、カトリック司祭ミラン・デュリカが執筆したこの教科書が、欧州連合からの資金で出版されたことを承知していますか。3. もしそうであれば、欧州委員会は、これらの資金が提供された出版計画書を開示することが可能ですか。また、当該資金の用途の監査方法を開示することが可能ですか。4. 欧州委員会には、この資金を引き上げる予定はありますか。また、この著書の配布を確実に差し止めることが可能ですか。5. 欧州委員会は、論争の的になっているこの教科書の発するメッセージが、「人種差別撤廃のための欧州年（European Year Against Racism）」の目的に反しているとお考えですか。6. 今後も実施される第三国への援助が、民主主義と公民権に関する欧州連合への加盟基準に反する目的で悪用されないようにするために、欧州委員会はどのような行動を取るおつもりですか。（Website of Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?pubRef=-//EP//TEXT+WQ+E-19972343+0+DOC+XML+V0//DE>, accessed in October 2021.）

(36) レオニー・ファン・ブラーデル（Leonie van Bladel）（1939年生）。オランダの政治家。1994年～1999年、欧州議会議員。

(37) 質問番号 E-2469/97, 件名：スロバキアによる PHARE プログラム助成金の悪用。以下を参照。（Website of Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?type=WQ&reference=E-19972469&language=EN>, accessed in October 2021.）

(38) オトー・バルドン（Otto Bardong）（1935年～2003年）。ドイツの政治家、歴史学者。1994年～1999年、欧州議会議員。ヨーロッパ人民党（カトリック民主グループ）（PPE-Group of the European People's Party (Christian-Democratic Group).）。

(39) 欧州委員会に提出されたオトー・バルドンの質問は以下のとおり（質問番号 No. E-2644/97, 1997年9月1日付, 件名は「著書『スロバキアとスロバキアの人々の歴史』への PHARE 基金からの補助金について」）。

欧州委員会は、M. S. デュリカの著書『スロバキアとスロバキアの人々の歴史』（ブラチスラバ、1996年2月（スロバキア教育省））〔以下、「本書」〕を出版するに当たり PHARE 基金から補助金を支出しました。本書には、小、中、高の各学校における歴史教材が掲載されています。このことについて以下のようにご質問いたします。1. この補助金の額はいくらで、交付の年

我々は、この問題に関しては重要な点が少なくとも2つあると見ている。第一点目は、歴史修正主義的な観点から執筆されたデュリカの教科書に対して国内で疑義が提起されたことである。第二点目は、欧州委員会から反応があったことである。ブリュッセル〔欧州委員会〕は、メチアル内閣にこの本を学校から回収させただけではない。欧州委員会は次のようにも言っている。

ティソ政権を擁護するこの著書〔デュリカの教材〕には、あつてはならない反ユダヤ主義的な内容が記載されている。このことを知らされた欧州委員会は、直ちに対策を講じ、この本を回収させた。今後欧州委員会には、スロバキアにおける「教育支援プログラム」のような教育プログラムに対する資金提供の予定はない。他の中欧や東欧の諸国ではこの種のプログラムは、1996年に終了している⁽⁴⁰⁾。

はいつでしょうか。2. 本書は、先史時代以降のスロバキアの歴史を基にして近隣諸国のうち特にチェコに対して敵対的なイメージが強い国民的神話を作り出そうするばかりか、反ユダヤ的傾向にあることを強調していますが、そのことを承知していますか。3. 特に、国家社会主義の衛星国におけるティソ政権（1939年～1945年）のことが、好意的に記述されていることをご存知でしょうか。4. 本書の刊行後、本書への書評を諸外国から入手したことはありますか。5. 教室での使用を目的とする本書のような出版物への助成を、今後は、いっそう徹底して監査することはできませんか。（Website of Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?pubRef=-//EP//TEXT+WQ+E-19972644+0+DOC+XML+V0/DE>, accessed in October 2021.）

(40) 欧州委員会を代表したハンス・ファン・デア・ブロック（Hans van der Broek）の回答（1997年9月4日）は以下のとおり。

スロバキア史に関する学校図書の印刷費についてスロバキア教育省から申請があったので、PHARE「改定版教育プログラム」に対してカリ

スロバキア国民党のヤーン・スロタ⁽⁴¹⁾議長は、欧州委員会のやり方を「焚書」と言い、スロバキア民主運動党（HZDS）の報道担当者は、欧州委員会の決定が著名な歴史学者を

キュラム開発のための資金を交付した。この申請書には、歴史上の出来事を時間の経過に沿って記述したものを補助教材として使用するとあり、その教材には、カナダ、ドイツ、スロバキアの各国で教鞭をとるスロバキア出身の歴史学者が執筆した3編の推薦状が添付されていた。欧州委員会はこの推薦状を重く見て、この著書に必要な出版助成として8万ECU^[注内訳注①]の交付を承認した。この著書には戦時中のスロバキアが果たした役割について誤った説明があり、反ユダヤ主義的な内容の侮辱的な資料が含まれている旨の通報を受けた委員会は、直ちに行動を起こした。委員会からは責任者が出席し1991年6月25日にスロバキア外務大臣と会談し、スロバキアの学校からこの著書を至急回収するよう要請した。この要請に応えたスロバキア首相は、1997年6月27日アムステルダムにおいてこの著書を回収すると発表した。1997年7月1日、スロバキア教育省はこの著書が「教育課程で使用されることはない」旨、声明を出した。1997年7月2日、〔スロバキア〕外相は欧州委員会に書簡を送り、政府の定例会議での問題提起を受けた教育省がかかる決定をした旨、報告した。委員会は、出版助成金の返納よりも、この著書を回収させることに努めている。欧州委員会は、本書の内容が「人種差別撤廃年（year against racism）」で具体化された目的と原則に反しているものと判断する。欧州委員会は、〔EUへの加盟〕申請国とのあらゆる交流と協同のための事業でコペンハーゲン理事会^[注内訳注②]が定めた民主主義基準の遵守が重要であることを強調するものである。スロバキアは、この基準の完全遵守を目標とし、それを達成せんとして、あらゆる努力を払いつつある。（See: website of Members of European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getAllAnswers.do?reference=E-1997-2343&language=EN> accessed in October 2021.）

[注内訳注①] ECU（European Currency Unit（欧州通貨単位））とは、1979年～1998年に、欧州共同体（EC）と欧州連合（EU）で使用されたバスケット通貨。1999年1月1日にECUとユーロ（EUR）は1対1で置換された。

侮辱していると述べた。スロバキア教育科学省もまた、欧州委員会の声明に対して激しく抗議した。しかし、7月初めになると、首相のメチアルは、アムステルダム会議の席上で学校からデュリカの著書を撤回すると約束せざるを得なくなった⁽⁴²⁾。

(2) デュルチャンスキーの顕彰碑建立

— 歴史修正主義者の発言と

地方自治体首長の行動 —

ライエツ町〔ジリナの南西約 20^{km}〕におけるフェルディナンド・デュルチャンスキー⁽⁴³⁾の胸像設置問題は、歴史修正主義歴史学と地域レベルの政治との関係を示す一例である。デュルチャンスキーは 1939 年から 1940 年までスロバキア共和国の外務大臣と

内務大臣を務めて、1938 年の秋には、ナチス・ドイツに積極的に協力した。1939 年～1940 年に採択された反ユダヤ主義的な法規には、すべて彼が署名している。第二次世界大戦後、スロバキアから逃亡したが、当時はまだ死刑が廃止されておらず、デュルチャンスキーにたいして国民法廷は欠席裁判により死刑を宣告した（名誉回復はしていない）。

2009 年、デュルチャンスキーの故郷であるライエツ町の議会は、元大臣の顕彰碑の建設案を承認した。この決定が下されたことによって、スロバキア修正主義歴史学が与えた社会ならびに地方自治体の政策に対する影響を具体的に検討できるようになった。

先に述べたように、1990 年代以降のスロバキアの歴史学界は、（幾分単純化して言えば）スロバキア共和国（1939 年～1945 年）の事績を擁護する「国民運動」に与^{くみ}する歴史学者と「そうでないその他」の歴史学者に二分されていた。このような両極構造は、今日でも学術の分野で見ることができる。1996 年、学術研究機関であるマティツァ・スロヴェンスカ⁽⁴⁴⁾の歴史部門は、デュルチャンスキーの生誕を記念して研究会を開催した。このイベントに招待されたのは、歴史修正主義運動に与^{くみ}する歴史学者だけであつた。研究会の終了後、主催者は、実質的にデュルチャンスキーを聖人に見立てるような集録を発行した。それは、戦時下のスロバキア共和国の官僚としてのデュルチャンスキーの行動を不退転の決意で擁護し、その反ユダヤの政策を正当化しようとしている⁽⁴⁵⁾。

〔注内訳注②〕コペンハーゲン理事会（Copenhagen Council）が定めた基準（コペンハーゲン基準）とは、「中・東欧等諸国の加盟交渉に当たり加盟条件とされる一連の基準。政治的基準（民主主義、人権、法の支配等）、経済的基準（市場経済等）など。」（『外務省 EU 関連用語集』（<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/eu/keyword.html>, accessed on March 15, 2023.）〕

(41) ヤーン・スロタ（Ján Slota）（1953 年生）。スロバキア国民党（Slovenská národná strana; SNS）の創設者、前党首。ナショナリスト。1994 年～1999 年、2003 年～2013 年、同党党首。1990 年～2006 年、ジリナ市長。

(42) Grigorij Mesežnikov, „Prezentácia vzťahu Európska únia — Slovensko hlavnými politickými aktérmi“, [“Presentation of the European Union — Slovakia relations by the main political actors,”] *Medzinárodné otázky* 8, No. 1, 1999, pp. 17–51.

(43) フェルディナンド・デュルチャンスキー（Ferdinand Ďurčanský）（1906 年～1974 年）。ナショナリストのリーダー。1939 年～1940 年、枢軸国スロバキアの外務大臣。スロバキアにおけるホロコーストの完全実施以前に下野したが、悪意に満ちた反ユダヤ・プロパガンダを拡散した。〔独自路線を歩もうとしたために、ザルツブルク会談後に（1940 年 7 月）、ドイツから忌避されて下野。戦後、国民法廷で死刑判決、国外逃亡につき未執行。〕

(44) 「マティツァ・スロヴェンスカ（Matica slovenská）」は、スロバキア国民に関する事柄にフォーカスしたスロバキアの科学・文化にかんする学術機関。学術、図書館、博物館の基礎を築くべく、1863 年、全スロバキア国民のための施設として設立。現在は、1997 年に制定された『マティツァ・スロヴェンスカ』に関する法律』に基づいて運営されている。

この研究会の数年後に(2009年)、ライエツ町議会は、同町立博物館の前に、デュルチャンスキーの顕彰碑を設置することを全会一致で決定した。ライエツ町長ヤーン・リバーリク(Ján Rybárik)がこの決定について説明したときに参照したのは、歴史修正主義者の寄稿だけが掲載されている上記研究会の集録であった。リバーリクは次のように述べた。

手持ちの情報によって、私は事柄を客観的に見ようと心がけています。私はライエツ町の市民ですから、かの人物についてはネガティブなことよりもポジティブなことのほうがより多く目に入ります。デュルチャンスキー氏の胸像をライエツ町に設置することができると考えています⁽⁴⁶⁾。

スロバキアでは、地方自治体がモニュメントを設置する場合の可否は当該地方自治体が決定することになっている。ライエツ町には、その決定に対して賛否両論が寄せられた。国の機関、宗教団体、学術団体は、(ライエツ

町民を含む)市民とともにデュルチャンスキーの顕彰碑の建立に異議を唱えた。建設に反対した団体としては、たとえば、ユダヤ教宗教団体中央連合会(Central Union of Jewish Religious Communities)、反ファシスト戦士スロバキア連合会(Slovak Union of Anti-Fascist Fighters)、ティリア市民協会(Tilia Civic Association)、ヒューマン・ムーブメント(Human Movement)などがある。スロバキア科学アカデミー歴史研究所(Institute of History of the Slovak Academy of Sciences: IH)が発表した公式声明を支持したのは、軍事史研究所(Military Historical Institute)(プラチスラバ)、スロバキア国民蜂起博物館(Slovak National Uprising Museum)(バンスカ・ビストリツァ)に加えて、歴史学の専門家若干名である。ヒューマン・ムーブメントは、地域の代表者と対話し、その後、スロバキアなどのヨーロッパ諸国の立法・司法当局に働きかけた。

2010年の地方選挙で新しく選出された町議会議員は抗議を受けて、スロバキア科学アカデミー歴史研究所、国民の記憶研究所(Ústav pamäti národa: ÚPN)、マティツァ・スロヴェンスカに専門意見を求めた。2011年3月には、スロバキア科学アカデミー歴史研究所、国民の記憶研究所、コメニウス大学(プラチスラバ)、マティツァ・スロヴェンスカなどの研究機関に所属する歴史学者が参加して、フェルディナンド・デュルチャンスキーの「顕彰」問題についてのシンポジウムが開催された。

スロバキア科学アカデミー歴史研究所などの歴史学者の意見によれば、胸像を建ててデュルチャンスキーを顕彰することは、現代スロバキアの民主主義原則とヒューマンイズムの価値観を否定するものとされた。さらに、かかる顕彰は戦時中の体制を正当化することに他ならないとも主張して、歴史研究所は次のように述べた。

F. デュルチャンスキーが賛同し、実

(45) Štefan Baranovič (ed.), *Ferdinand Ďurčanský (1906–1974). Zborník zo seminára o Dr. Ferdinandovi Ďurčanskom, ktorý sa konal pri príležitosti jeho nedožitých deväťdesiatych narodenín v Rajeci 8.12.1996*, [Ferdinand Ďurčanský (1906–1974). Proceedings of the Seminar on Dr. Ferdinand Ďurčanský, which took place on the occasion of his ninetieth birthday in Rajec 8.12.1996, (1996年12月8日にライエツで開催されたフェルディナンド・デュルチャンスキー博士の生誕90年記念セミナーの集録,)] Martin: Matica Slovenská, 1998.

(46) 「フェルディナンド・デュルチャンスキーの顕彰碑は、撤去される予定はない。[ライエツ町は]歴史学者による専門意見を待っている。」*Denník Sme*, February 24, 2011, accessed in October 2021: <https://myzilina.sme.sk/c/5781369/durcanskeho-soc-hu-zatial-neodstrania-mesto-chcestanovisko-od-historikov.html>.

践を通じて顕在化した政治原則は、今日のスロバキア共和国の民主主義の考え方と鋭く対立している。我々は、この論争「顕彰碑の建立を巡る意見の対立」がデュルチャンスキー個人とかその胸像についてだけでなく、戦争で国民を疲弊させたスロバキア共和国の全体主義体制をも巧妙に正当化しようとして仕組まれたものであると確信する。討論集会では、F. デュルチャンスキーの公人としての政治活動に対しては肯定的な意見よりも批判のほうが多く出された。ところが、ペーテル・ムリーク (Peter Mulík) (マティツァ・スロヴェンスカ付属スロバキア歴史研究所) の報告文書はこのときの討論集会の内容と一致していない。このことを、我々はあえて表明するものである。胸像の除幕式を開催することは、今日の民主主義社会が拠って立つ原則の否定以外の何物でもない⁽⁴⁷⁾。

このとき、今では公然とティソ政権を支持している歴史学者マルティン・ラッコ (Martin Lacko) が国民の記憶研究所の代表者として述べた談話の中で、デュルチャンスキーの反ユダヤ主義について、ただ一言、次のようにコメントした。「そうは言うものの、デュルチャンスキーは、内務大臣として、特に経済の分野でユダヤ人に対して執った措置は限定的であった。」ラッコは、デュルチャンスキーの政治活動を強調して、胸像の設置問題についてはノーコメントであった⁽⁴⁸⁾。

(47) フェルディナンド・デュルチャンスキーに対するスロバキア科学アカデミー歴史研究所専門研究者の見解については、以下を参照。http://www.history.sav.sk/index.php?id=ducansky, accessed in October 2021.

(48) 国民の記憶研究所の専門家の意見については、以下を参照。https://www.upn.gov.sk/data/pdf/historicke-hodnotenie-FD.pdf, accessed in October 2021.

町長のヤーン・リバーリックは、この問題に対する自分の立場に固執し、1998年に歴史修正主義の立場の研究者が執筆した研究会の出版物を事あるごとに参照していた。2011年6月、町議会議員の顔ぶれは変わったが、町議会は2009年の決定を支持した。13人の議員のうち、デュルチャンスキーの胸像の撤去に票を投じたのは、たった一人しかいない⁽⁴⁹⁾。

これに対して、ヒューマン・ムーブメントは犯罪の疑いがあるとして告発した。この告発を受けたスロバキア警察は「基本権と自由の抑圧を目的とするグループの活動に対する支援・促進」という犯罪に当たるかどうかの捜査に着手したが、2011年8月に不起訴とした⁽⁵⁰⁾。

リベラルなラディチョヴァ⁽⁵¹⁾ 内閣でさえ行政権が及ばず、顕彰碑は撤去できなかった。政府は数ヶ月かけて、ようやく次のような「ライエツ町におけるF. デュルチャンスキーの胸像の設置に関する政府声明」を発表した。

地方自治体設置法の定めにより、町等の自治体の地域内における歴史的モニュメントの設置に関する決定は、当該地方自治体の権限内にある。本件の所管はライエツ町議会である。スロバキア共和国

(49) ライエツ町議会 (2021年5月19日開催) の議事録 (抄録) については、以下を参照。http://www.rajec.info/files/16995-ZAPIS20110609.pdf, accessed in October 2021.

(50) „Odhalenie busty Ďurčanského spustilo policajné vyšetovanie“, [“The Unveiling of a Bust of Ferdinand Ďurčanský started a Police Investigation,”] *Denník Pravda*, June 14, 2011, https://spravy.pravda.sk/regiony/clanok/210914-odhalenie-busty-durcanskeho-spustilo-policajne-vysetrovanie/, accessed in October 2021.

(51) イヴェタ・ラディチョヴァ (Iveta Radičová) (1956年生)。スロバキアの社会学者、2010年～2012年、首相。2005年～2006年、労働大臣。2012年、一時的に国防大臣兼務。

政府は、地方自治体の決定を覆すことはできない。フェルディナンド・デュルチャンスキーの人となりに関して、スロバキア共和国政府は、「デュルチャンスキーはドイツ帝国の支持者として行動し……，その国家運営では非民主的な体制の強化に協力するとともに、反ユダヤ的な法規範の準備、採択、執行に協力した」とする〔スロバキア科学アカデミー〕歴史研究所⁽⁵²⁾の声明には疑いの余地がないものと判断している。スロバキア共和国政府は、犯罪や重大な人権侵害に関与した全体主義体制のシンボル、あるいはそれに加担した支配エリートの責任を軽く見たり、間接的にでも復権させたりしようとする試みはいかなるものであろうとも、すべて非難する⁽⁵³⁾。

ここで、若干の歴史学者による指摘を紹介しておきたい。それは、ユダヤ人コミュニティに対する政治的迫害に直接関与した人物の顕彰碑の建立を容認できないという指摘である。ナチス・ドイツに協力した元閣僚デュルチャンスキーは、1944年に〔ドイツと親独政権に対する〕蜂起が勃発したとき、それをはっきりと非難した。それなのに、デュルチャンスキーの胸像はスロバキア国民蜂起にちなんだ名称の広場に置かれている。それは、悲劇的な皮肉としか言いようがない。そして、そのことは、デュルチャンスキーを指導者の一人とする戦時中のスロバキア共和国の全体主義体制の名誉回復をしようと躍起になっている人々（本件の場合は地方政治家）を褒めた

たえ、顕彰することでもある。政治の舞台に立つ者は、「歴史の論理」なるものによって自らの意図と行動を正当化しようとするのが常である。本件の場合には、歴史修正主義歴史学は、町長と町議会が具体的な政治的措置を執るときの踏み切り板の役割を果たした。それを踏み台にして飛びだそうとした先にあるのは、戦時中のスロバキア共和国の歴史と1993年に建国された現代の国家とを結びつけて、より強かった国家と建設途上にある国家との間の連続性を担保することである。それは、少なくともライエツの町民にとっては、新しいシンボルを作り上げて歴史の記憶と国民の意識を歪めようとする試みであったとも考えられる。

スロバキア科学アカデミー歴史研究所などの学術機関による批判的歴史学からの専門的分析を参照した政府声明は、地方政治家の行動とは対立している。ただ一つの歴史上のエピソードに対するこの相対立する二つの立場はまったく異なった影響を与えているが、現実を正しく映し出しているのは、そのうちの一方だけである。今日に至るもライエツ町には、デュルチャンスキーの顕彰碑が建っている。政府はスロバキア科学アカデミー歴史研究所とマティツァ・スロヴェンスカの両方にたいして財政支援を続けているが、このことは付言する価値があるのではないか。

本項の最後に、スロバキアの社会学者であるミハル・ヴァシェチカ（Michal Vašečka）の意見を引用したい。2018年に彼は、社会が国の歴史を收拾するのに手を焼くようになれば、価値観の相対化現象^{〔訳注6〕}が出現する

(52) スロバキア科学アカデミー歴史研究所の英語による公式表記は「Institute of History（歴史研究所）」である。

(53) スロバキア共和国政府の声明については以下を参照。<https://www.vlada.gov.sk/vyhlasenie-vlady-sr-k-umiestneniu-bustyf-durcanskeho-v-rajci/>, accessed in October 2021

〔訳注6〕歴史現象に対する単一の（絶対的）評価が揺らぐようになれば、多様な見方が現れる（逆も真）。この結果かつては正しいとされた一つの見方（絶対的見解）は、それも一つの見方に過ぎないとされるようになる。これが相対化である。相対主義は、唯一絶対の真理はない、それぞれに正しい（間違っているところがある）というものの見方。

であろうと強調した。論争の的になっている人物の顕彰碑の建立はその一例であるが、ヴァシェチカは、そのような傾向が続いて市民社会が断固たる措置を執れなくなれば、将来的にはこの種の顕彰碑がもっと増えると予想して、次のように述べている。

かたやデュルチャンスキー、こなた
ヴァシル・ビラック (Vasil' Bil'ak)^(補注)、
この二人は人格に問題があり、直接手は
下していないかもしれないが、その手は

(補注) ヴァシル・ビラック (Vasil' Bil'ak) (1917年～2014年)。1955年～1968年、1969年～1971年、スロバキア共産党中央委員会委員、1954年～1989年にチェコスロバキア共産党中央委員会委員、1962年～1968年、スロバキア共産党中央委員会書記、1968年1月～8月、同書記長。1968年4月～1988年12月、チェコスロバキア共産党中央委員会幹部会員。1968年11月～1988年12月、チェコスロバキア共産党中央委員会書記(外交政策とイデオロギー領域で決定的な影響力を果たす)。1960年～1989年、国民議会議員、その後連邦議会議員(基本的にソビエト社会主義共和国連邦寄り。)1968年、共産党保守勢力を代表するのひとりとしてソ連の介入を支持し、「復興過程」であった「プラハの春」の清算に尽力。ワルシャワ条約機構軍への招待状に署名した一人。共産党内ではブレジネフ指導部(いわゆる「健全勢力」)の主要イデオロクであり、新スターリン主義の教条主義を代表。1970年にチェコスロバキア共産党が発刊した『深まる危機からの教訓(Lessons from Crisis Development)』のイデオロク。先の事件を「反革命」、ソ連の介入を「きょうだい国への援助」とする公式解釈に立つ。チェコスロバキアにおける「正常化」(1989年11月まで)のときの中心人物の一人。2015年、スロバキア共産党は、ヴァシル・ビラックの胸像と「真実は真実のままにある。(Pravda zostane pravdou. (The truth will remain the truth.))」と刻まれた記念碑の除幕式を、彼の出身地クラジュナ・ピストラ村で開いた。同日夜、コシツェの市民活動家2名(芸術家ペーテル・カルムス(Peter Kalmus)とルボシュ・ロレンズ(Luboš Lorenz)が抗議のため胸像に赤い塗料を塗り、碑には赤い字で“SVIŇA”(豚)と書き、その後自首する事件があった。

血に汚れている。このことについて、国民の合意が形成されない限り、こうした胸像は作られ続けるだろう。遺憾ながら、人は過去の時代から様々な価値観を継承し、あらゆるものの中から最良のものだけを保存しようとするが、それは同時に価値観を相対化することでもある。これに対抗するためには、断固たる措置が必要である⁽⁵⁴⁾。

2020年、スロバキア共和国国会は、二つの時代(問題ある歴史を刻んだ共産主義支配の時代(1948年～1989年)と1939年～1945年の時代[スロバキア共和国の時代])のエピソードと国民全体に共通する道義心との間に齟齬がないようにするために、法律を改正した。これにより記念碑や街路には、いずれの全体主義体制を代表する者の氏名を付けることができなくなった⁽⁵⁵⁾。

(3) 司教ヤーン・ヴォイタシュチャークの 列福^[訳注7]

歴史学と政治学との関係をさらに考察する

(54) Cited from Miroslav Kern, „Sociológ Vašečka o 70 rokoch od nástupu komunizmu: Chýba nám tu múzeum totality“, [“Sociologist Vašečka on 70 Years since the Start of the Communist Rule: We lack a Museum of Totalitarianism.”]. *Denník N*, February 23, 2018, <https://dennikn.sk/1034803/sociolog-vasecka-o-70-rokoch-od-nastupu-komunizmuchyba-nam-tu-muzeum-totality/>. accessed in October 2021.

(55) 「共産主義体制の非人道性と非合法性に関する法律(1996年法律第125号)を改正する法律」(2020年法律第338号, 2020年11月4日制定)については、以下を参照。<https://www.slov-lex.sk/pravnepredpisy/SK/ZZ/2020/338/> [quot. 2022-05-05] accessed in May 2022.

[訳注7] 列福(beatification, [伊] beatificazione)。カトリックでは、生前、徳と聖性を備えた信者を審査により列福する(授福とも)。福者認定(列福)を経て一定期間後に教皇が、その者を信仰の範として聖人と定め顕彰する。これを列聖(canonicalization, [伊] canonizzazione)と言う。

ために、司教ヤーン・ヴォイタシュチャークの列福をめぐる論争を考察することにしよう。この事例は、スロバキアの国と国民の歴史に関する知識の問題を考えさせるだけでなく、ホロコーストに対するカトリック教会の立場を考えさせることにも連なる。共産主義の支配下で政権によって弾圧されていた教会は、1989年以降になると、数十年に亘る抑圧から解放されて大きな権威を持ち、様々な社会問題だけでなく内政にも口を出すようになった。2001年と2011年の人口センサスによると、国民の60%以上がカトリック教徒であり、スロバキアは統計上カトリック教国である⁽⁵⁶⁾。1992年スロバキア共和国憲法前文⁽⁵⁷⁾は、「キリルとメトディウスの精神的遺産」⁽⁵⁸⁾に言及してはいるものの、スロバキア

共和国は宗教的権威に左右されない国であると明文化している⁽⁵⁹⁾。

スロバキア大統領ズザナ・チャプトヴァ⁽⁶⁰⁾は、2021年9月のローマ教皇フランシスコ1世のスロバキア訪問に当たり、スロバキアの民主的でヨーロッパ的な性格だけでなく、キリスト教の伝統についても言及して次のように述べた。

EUという民主主義国家の大家族の不可欠な一員であるスロバキアには、EU

(56) 「スロバキア共和国は宗教的に中立であって、この国には統治原理とする国家宗教は存在しない。信教の自由は法律で保障されている。国民の宗教意識は高い。2011年の人口センサスでは、信仰を持つ者 75.97%，無宗教 13.44%，無回答 10.59%である。信仰を持つ者の大半はローマ・カトリックの信徒である。」“Slovakia. Population: Demographic Situation, Languages and Religions,” Website of the European Education and Culture Executive Agency: https://eacea.ec.europa.eu/national-policies/eurydice/content/population-demographic-situation-languages-and-religions-72_en, accessed in October 2021.

(57) スロバキア共和国憲法前文。「先人の政治的・文化的遺産ならびに数世紀に亘る民族存続と国家確立のための闘争を通じて得られた経験を念頭に置き、キリルとメトディウスの精神的遺産と大モラヴィアの歴史的遺産を胸に刻み、自己決定に対する国家の自然権を認識し、スロバキア共和国の領土に居住するマイノリティとともに、外国の民主主義諸国と平和的な協同を続けるために、民主的な政治形態の実現、自由な生活の保障、精神文化の振興と経済の繁栄に努力する我々スロバキア共和国の国民は、ここに我々の代表者を通じて、この憲法を採択した。」(Website of President of Slovak Republic: <https://www.prezident.sk/upload-files/46422.pdf>, accessed in October 2021.)

(58) 聖キリル (Cyril) (829年～869年、コンスタンティヌスとも) と聖メトディウス (Methodius)

(815年～885年) はテッサロニキ (ソロン (Solun) とも) 生まれの兄弟で神学者、宣教師。9世紀、大モラヴィア王子ラスティスラフ公 (Rastislav, the Prince of Great Moravia) の要請で、ビザンチン帝国皇帝ミカエル3世が大モラヴィアに派遣した。二人はスラブ人に「キリスト教を」伝道。スラブ語のアルファベットの原型であるグラゴル文字を創案したとされるキリルは、聖書の一部や典札文をスラブ語に初めて翻訳した。またメトディウスはスラブ語による教育、文化、文学の中心となった学校を設立し、パンノニアと大モラヴィアの大同教に任命された。1980年、教皇ヨハネ・パウロ二世は、この兄弟をヨーロッパの共同守護聖人 (co-patrons) とした。Gyula Moravcsik, (ed.), *Constantine Porphyrogenitus: De Administrando Imperio* (2nd revised ed.). Washington D.C.: Dumbarton Oaks Center for Byzantine Studies, 1967; Francis Dvorník, *Byzantine Mission among the Slavs: SS. Constantine-Cyril and Methodius*. Rutgers University Press: New Brunswick, New Jersey, 1970, p. 484. [キリルとメトディウスについては以下も参照。[日本] カトリック中央協議会「教皇ベネディクト十六世の182回目的一般謁見演説聖キュリロスと聖メトディオス」(Website of the Catholic Bishop's Conference of Japan: <https://www.cbj.catholic.jp/2009/06/17/6687/>, accessed on Oct. 8, 2023.)]

(59) 「第1章第1条第1項 スロバキア共和国は、法が支配する民主的な主権国家であり、いかなるイデオロギーにも、宗教にも拘束されない。」(<https://www.prezident.sk/upload-files/46422.pdf> accessed in October 2021.)

(60) ズザナ・チャプトヴァ (Zuzana Čaputová) (1973年生)。スロバキアの政治家、弁護士、環境活動家。2019年、スロバキア大統領。

から安全と繁栄のための重要な国際保障が与えられております。何世紀もの間、キリスト教とカトリック教会は私たちの文化的アイデンティティにとって欠くことのできない一部となっており、今日に至っております⁽⁶¹⁾。

教皇フランシスコ1世の回勅(encyclicals) [教皇が発出する回状] に触れた大統領は、あらゆる形態の反ユダヤ主義やその他の宗教的不寛容がキリスト教的な価値観とは矛盾して、それを教皇は許していないと述べた⁽⁶²⁾。

我々は、これまでスロバキアのカトリック教会幹部が戦時中(1939年～1945年)の自国の歴史的事実を直接批判することはなかったと見ている。カトリックの聖職者ヨゼフ・ティソによる共和国の領導が、その背景にあるからではないか。さらに言えば、教会幹部がフリンカ・スロバキア人民党の支配する政治体制(市町村、郡、県などの地域レベルを含む)の中で重要な地位を占めていたということもあるのではないか。したがって、教会幹部は統治プロセスに直接入り込み、事実上一党独裁を体現し、この意味では、一介の国家公務員として働いたか、精神的権威者としてたち振る舞ったかを問わず、スロバキアの

反ユダヤ政策とホロコーストに影響を与えたり、加担したりしていたのである。

2012年、スロバキア司教協議会⁽⁶³⁾は、1942年のスロバキアからのユダヤ人の強制移送について、次のような声明を出した。

…… 当時の責任ある政治家はキリスト教とその価値観を信じていたが、中にはそれに違背して、実際にユダヤ人を迫害した者もいた。度を越したやり方が正しいと思い込んだり、多少とも唯々諾々としてそのような考え方に従ったりした。特に心が痛むのは、危険さわまりない状態に置かれた人々の運命を見ていながら、無関心な態度を取ったことである。強制移送の直後に判明したことではあるが、それはユダヤ人を保留地に定住させるためではなく、多くの人が確信していたように、ユダヤ人を組織的に根絶やしにするための措置であったのに、である⁽⁶⁴⁾。

司教協議会が、戦時中の共和国を領導したティソの名前を具体的に挙げなかったことは、指摘しておきたい。これらの事実を全体的に勘案する読者は、歴史学者の中には1939年～1945年の政権のことを聖職者ファシスト(clero-fascist)政権と言っている者がいることを思い起こして欲しい⁽⁶⁵⁾。

(61) Website of the President of Slovak Republic: <https://www.prezident.sk/en/article/papez-frantisek-vidi-slovenskoako-posla-pokoja-v-srdci-europy/>, accessed in October 2021.

(62) 「あなたは、福音の中心には、貧しい人々、ホームレスの人々、戦争、テロ、貧困によって自国を追われた人々への配慮があることを強調しています。あなたは何度も、反ユダヤ主義だけでなく、宗教的不寛容もキリスト教とは相容れないと繰り返しています。」スロバキア共和国大統領の声明については、以下を参照。<https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.prezident.sk%2Fupload-files%2F76428.doc&wdOrigin=BROWSELINK>, accessed on March 18, 2023.

(63) スロバキア司教協議会(Konferencia biskupov Slovenska: KBS)は1993年3月23日設立。スロバキア共和国のローマ・カトリック教会とギリシア正教会の司教で構成。

(64) スロバキア司教協議会の声明については以下を参照。<https://www.tkkbs.sk/view.php?cislocianku=20210913093>, accessed in October 2021.

(65) Miloslav Szabó, *Klérofašisti. Slovenskí kňazi a pokušenie radikálnej politiky (1935-1945)*, [Clerofascists. Slovak Priests and the Temptation of Radical Politics (1935-1945).] Bratislava: Slovart, 2019; Miloslav Szabó, "Clerical Fascism? Catholicism and the Far-Right in the Central European Context (1918-

以下では、戦時下スロバキアのカトリック教会を代表する司教ヤーン・ヴォイタシュシャーク (Ján Vojtaššák) を批判的に取り上げた歴史学者による論争を紹介する。この司教は、与党フリンカ・スロバキア人民党の党員であるとともに、当時、国会の第二院と理解されていた(実質的には諮問機関であった) 国務院の議員にして、副議長兼顧問でもあった⁽⁶⁶⁾。この司教ヴォイタシュシャークにかんする五つの論点を紹介しよう。

(i) 国務院議員としての発言

第1論点は、ユダヤ人とユダヤ人問題の「解決」というテーマについての国務院議員としての発言である。『バチカンとスロバキア共和国(1939年～1945年)および関連文書』(1992年)⁽⁶⁷⁾に集録されたいくつかの文

書は、スロバキアにおけるユダヤ人の迫害に対するバチカンの立場を暗示し、迫害への教皇聖座の介入に言及している。この資料集にはブラチスラバ駐在バチカン代理大使ジュゼッペ・ブルツィオ師 (Giuseppe Burzio) の報告を伝える文書が集録されている。その文書は、スロバキアの状況を映し出しているが、その中でヴォイタシュシャークの振る舞いを批判している。また、『スロバキアのホロコースト——ユダヤ人問題にかんする大統領、政府、国会、国務院——』(ニジニャンスキー＝カメネツ共編、第2巻、2003年)⁽⁶⁸⁾には、国務院におけるヴォイタシュシャークの演説が収録されている。歴史学者のヤーン・フラヴィンカ、イヴァン・カメネツ、マルティン・ステイアンは、1938年から1945年までのヴォイタシュシャークの活動を論文にまとめて公表し、戦時中の彼は由々しい問題を犯したと指摘した⁽⁶⁹⁾。

(ii) アーリア化への関与

歴史学者が事実を発掘して、その真偽を検証したこともある。国務院議員としてのヴォイタシュシャークの発言についてはその真贋は疑う余地がない。それに加えて、この司教がバルドフツェ村 [コシツェの北西約 65^{km}]

1945),” *Historický časopis* (Bratislava: Slovak Academic Press, s r. o, 2018, Vol. 66, No. 5, pp. 885–900; Eduard Nižňanský and Barbora Jakobyová, „Lokálni aktéri počas holokaustu. Prípady dvoch katolíckych kňazov z Dolného Kubína: Ignác Grebáč-Orlov a Viktor Trstenský“, [“The Local Actors during the Holocaust. The Case of two Catholic Priests from Dolný Kubín: Ignác Grebáč-Orlov and Viktor Trstenský,”] *Historik a dejiny: v československom storočí osudových dátumov*, Bratislava: Veda, 2018, pp. 59–86. [clero (聖職者)の語源は κληρος (ギリシア語), clerus (ラテン語)。

(66) Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, (eds.), *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939–1945). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 2. President, Government, Parliament of the SR and State Council on the Jewish Question (1939–1945). Documents,]; Ivan Kamenec, „Štátna rada v politickom systéme Slovenského štátu v rokoch 1939–1945“, [“The State Council in Political System of the Slovak State from 1939 to 1945,”] *Historický časopis*, Bratislava: Slovak Academic Press, s r. o, 1996, Vol. 44, No. 2, pp. 221–242; Igor Baka, *Politický systém a režim Slovenskej republiky v rokoch 1939–1940*, [The Political System and Regime of the Slovak Republic in 1939–1940,] Bratislava: VHÚ, 2010, p. 322.

(67) Ivan Kamenec, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek, (eds.), *Vatikán a Slovenská republika /1939–1945/. Dokumenty*, [Vatican and Slovak Republic /1939–1945/. Documents,] 1992.

(68) Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec (eds.), *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939–1945). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 2. President, Government, Parliament SR and State Council about Jewish Question (1939–1945). Documents,]

(69) Ján Hlavinka, Ivan Kamenec and Martin Styan, *The Burden of the Past. Catholic Bishop Ján Vojtaššák and the Regime in Slovakia (1918–1945)* [English translation], Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2014.

とベトラノフツェ村〔コシツェの北西約95^{km}〕でのアーリア化に責任があることを示す証拠文書も発見された。フラヴィンカとカメネツは、労働収容所に移送されたスピシウスケ・ポドフラディ〔コシツェの北西約60^{km}〕出身のユダヤ人、アレクサンデル・レーリンツ (Alexander Lörcinc) の運命を、ヴォイタシュシャークが裏に回って決定づけたと考えている。このカトリック聖職者は、1943年の国務院で、内務省第14局長アントン・ヴァシェック (Anton Vašek)⁽⁷⁰⁾ の気を引こうとして、レーリンツのことをご注進に及んだからである。このころは、もう強制収容所への移送は行われていなかったのに、レーリンツは労働収容所に収容されることになった。

(iii) 列福

このようなことが暴露されているにもかかわらず、それを逆なでするかのように、カトリック教会側の歴史学者、どちらかと言うとナショナリズムに傾いた研究者、教会の代表者などはヴォイタシュシャークの評判や行動を擁護した。それだけでなく、スロバキアの教会は彼の列福手続きを進めることを決定した。バチカンが定めた手続きによれば、列福

の審理には、候補者の伝記が必要とされている。ヴォイタシュシャークに関する最初の研究論文を執筆したのは、同じカトリック司祭ヴィクトル・トルステンスキー (Viktor Trstenský)⁽⁷¹⁾ である。第二次世界大戦後、ヴォイタシュシャークは共産主義政権によって迫害され、1951年のでっち上げ裁判で、禁固24年が言い渡された。共同被告の司教2人 (ミハル・ブザルカ (Michal Buzalka)⁽⁷²⁾ とパヴェル・ゴイディッチ (Pavel Gojdič)⁽⁷³⁾) には終身刑が宣告された。

1995年にスロバキアを訪問した教皇ヨハネ・パウロ2世は、[上記の迫害を踏まえ] レヴォチャ市〔コシツェの北西約75^{km}〕の2ヶ所で説教したとき、ヴォイタシュシャークの列福に触れて、次のように述べた。

あなた方の中で年配の方の目には高德のヤーン・ヴォイタシュシャーク司教の姿が焼き付いています。ギリシア・カトリック教徒〔ギリシア典礼を用いるローマ・カトリック教会の信徒〕のきょうだいたちはパヴェル・ゴイディッチ司

(70) アントン・ヴァシェック (Anton Vašek) (1905年～1946年)。スロバキアのジャーナリスト、政治家。1942年、内務省第14局 (いわゆる「ユダヤ人局」) の局長として、強制移送などのユダヤ人問題の「解決」のための技術面と行政面における組織化に担当。[Vanda Rajcan, “Anton Vašek, Head of the Interior Ministry’s 14th Department, His Responsibility, and Information about the Deportees,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to inform the World on Genocide* (Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25–26 August 2015), pp. 124–139. (ラジカン「スロバキア内務省第14局長アントン・ヴァシェックと強制移送にたいするその責任」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学)第71巻第1号, 2023年6月)。]

(71) Viktor Trstenský, *Sila viery, sila pravdy: Život a dielo najdostojnejšieho biskupa Jána Vojtaššáka, mučenika cirkvi a národa*, [The Power of Faith, the Power of Truth: The Life and Work of the Most Dignified Bishop Ján Vojtaššák, a Martyr of the Church and the nation,] Bratislava: Senefeld-R, 1990.

(72) ミハル・ブザルカ (Michal Buzalka) (1885年～1961年)。トルナヴァ大司教区の司教補。1940年～1945年、スロバキア軍の叙任司祭。共産主義政権によって迫害され、投獄。2000年、列福の手続き開始。

(73) パヴェル・ゴイディッチ (Pavel Gojdič) (1888年～1960年)。ルシン人のバシレイオス会修道士、スロバキア・カトリックのプレシヨフ教区司教。1940年、教皇がプレシヨフ司教に任命。1939年、ムカチエヴォで司教を務めた。チェコスロバキアの共産主義政権によって投獄。2001年、教皇ヨハネ・パウロ2世が列福。2007年、ヤド・ヴァシェムが「諸国民の中の正義の人」として認定。

教の姿を重ねることでしょう。二人の司祭はいずれもでっち上げ裁判の末に投獄されました。二人はスロバキアの教会の忠実な奉仕^{あかし}の証として、列福に値します⁽⁷⁴⁾。

列福の手続きを開始するためには、スロバキアの全管区司教による同意が必要であった。列福の手続きは、「聖人の大義のための会衆（ローマ）（Congregation for the Causes of Saints in Rome）」の承認を経て、1996年、スピシュ司教フランティシェク・トンドラ（František Tondra）によって開始された⁽⁷⁵⁾。2001年11月、全司教区での手続きが完了し、「聖人の大義のための会衆」に引き継がれた。しかし、2003年、教皇聖座官房はフランティシェク・トンドラに次のような書簡を送った。

教皇聖座はヴォイタシュシャーク司教にたいしては敬意を払っているが、当面はその列福が適当とは考えていない。

同時に、ナショナリズムやキリスト教に傾く歴史学者⁽⁷⁶⁾やカトリックの一部代表者⁽⁷⁷⁾

はヴォイタシュシャークを擁護しようとして、前述の調査や文書が明らかにしたとされる発見事実や結論に疑義を提起した。手始めに彼らは、バルドフツェ村の事件に疑惑の目を向けた。ところが、フラヴィンカとカメネツが2冊の著書を出版すると、ヴォイタシュシャークの役割と責任を認めざるを得なくなった。それと同時に、ベトラノフチェ村のアーリア化に関する発見事実には何も言えなくなった。複数の歴史学者（フラヴィンカとカメネツではない）が、大統領のティソは国土庁長官カロール・クリノフスキー（Karol Klínovský）に口利きを頼みヴォイタシュシャークに土地を取得させたことを明らかにしたからである。ところが、ヴォイタシュシャークがレーリントツ〔前出のユダヤ人〕の迫害に一枚噛^かんでいたことには知らぬ顔をして、関与を否定した。

(iv) 強制移送の中止

ヴォイタシュシャークの擁護派は、1943年以降は強制移送を中止させるべく、この司教が内務大臣アレクサンデル・マッハに送った書簡なるものを公表した。このことにも触れておかなければなるまい。書簡の主は強制収容所から脱走した無名のユダヤ人だというのが実相である。ヴォイタシュシャークは、この被害者が収容所における残虐行為を知らせようとして送った書簡の受取人である。司教からの書簡なるものは、〔無名〕ユダヤ人

(74) Pope John Paul II in Slovakia and his Speech: <https://www.kbs.sk/obsah/sekcia/h/dokumenty-avyhla-senia/p/dokumenty-papezov/c/navsteva-svateho-otca-v-sr-1995>, accessed in October 2021.

(75) カトリック教会において「聖人の大義のための会衆」（ラテン語：Congregatio de Causis Sanctorum）とはローマ教皇庁に組織される会衆であり、「英雄的な美徳（heroic virtues）」〔並外れた善行〕の宣言から列福を経て、聖人として列聖するまでの複雑な手続きを統督する。

(76) たとえば、次の人々。フランティシェク・ドゥルゴシュ（František Dluhoš）、ヤーン・ドゥダ（Ján Duda）、ミラン・S. デュリカ（Milan S. Ďurica）、エミーリア・フラボヴェツ（Emília Hrabovec）、イヴァン・ハルベツキー（Ivan Chalupský）、スタニスラフ・マーイェク（Stanislav Májek）、ペーテル・ムリーク（Peter Mulík）、イヴァン・ペトランスキー（Ivan Petranský）、フランティシェク・ヴヌク（František Vnuk）。

(77) たとえば、次の人々。枢機卿ヤーン・フリズストム・コレツ（Cardinal Ján Chryzostom Korec）、ニトラ修道院司教ヴィリアム・ユダーク（Bishop of Nitra Mons., Viliam Judák）、モンシニョール・ヤーン・クボシュ（スピシュ管区長）（Mons. Ján Kuboš — the administrator of the Spiš Diocese）、モンシニョール・キリル・ヴァシル（コンチェウ司教区司教）（Mons. Cyril Vasil — Bishop of Košice eparchy）、ペーテル・ユルチャガ（神の僕ヤーン・ヴォイタシュシャーク司教列福の大義の調査請願者）（Peter Jurčaga, the postulator for the cause of beatification of the Servant of God, Bishop Ján Vojtaššák）。

の証言をマッハに転送するときにはヴォイタシュ・シュシャークが添付した添え状に過ぎない。したがって、ヴォイタシュ・シュシャークがみずから受難のスロバキア・ユダヤ人について何か書いたかどうかを裏付けることは不可能である。

1943年以降に追加的な強制移送がなかったということ、たった一つの原因だけで説明しようとするのは、事柄をあまりにも単純化していると言わざるを得ない。ヴォイタシュ・シュシャークがマッハに懇願したから強制移送が行われなかったという議論も、非常に疑わしい。他にも考慮すべき要因はいくつもある。まず手始めに、この問題に対するバチカンの介入を示す若干の文書があることを指摘したい⁽⁷⁸⁾。改宗者(キリスト教に改宗したユダヤ人)だけでなく、スロバキアに居住しているユダヤ人をも保護しようとして書かれた1943年3月8日付の教書[司教が管区の聖職者または管区の信者に与える文書]もある。

加えて、枢軸国に対する戦況の潮目が変わってきたという、当時の政治的・軍事的な動向を考慮することも必要である。スターリングラード[1943年2月]やクルスク[1943年8月]の戦いで敗北を喫したドイツ国防軍は、東部戦線で守勢に立たされていた。北アフリカ戦線ではイタリア軍とドイツ軍がともに敗退した(チュニス, 1943年5月)。⁽⁷⁸⁾ [1943年7月には]シチリア島に上陸した連合軍はイタリア本土を北上し、ムッソリーニ政権を崩壊させた。この年の1月には、チャーチルとルーズベルトはカサブランカで会談し、「ナチス・ドイツとその同盟国が無

条件降伏するまで戦争を続行すること」を決定した⁽⁷⁹⁾。以上に述べたような直接、間接の圧力を受けたために、マッハは、8月の閣僚会議でこれ以上はユダヤ人を強制移送しないと表明した⁽⁸⁰⁾。ここでは、ナチス・ドイツがスロバキアにたいして強制移送の再開を迫ったと認められる文書の発出は確認されていないことを付言しておく⁽⁸¹⁾。

(v) イクス『ピウス12世とユダヤ人』 (2021年)を巡る論争

最後に、教皇聖座官房国事部古文書館長ヨハン・イクス(Johan Ickx)著『ピウス12世とユダヤ人——バチカンの公文書館員が明らかにする第二次世界大戦中における教皇の役割——』(2021年)⁽⁸²⁾を巡る論争を取り上げる。この著書の中には、司教ヴォイタシュ・シュシャークの行動を暴露している箇所があり、それに対する見解が示されている。これには、この司教を擁護する歴史学者数人が「ヴォイタシュ・シュシャーク司教の真の姿のために」と題

(79) カサブランカ会談(Casablanca Conference)の結論については、以下を参照。<https://www.britannica.com/event/Casablanca-Conference>, accessed in October 2021.

(80) Eduard Nižňanský and Ivan Kamenec, (eds.), *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939–1945). Dokumenty.* [Holocaust in Slovakia 2. President, Government, Parliament of the SR and State Council on the Jewish Question (1939–1945). Documents.]

(81) Eduard Nižňanský, (ed.), *Holokaust na Slovensku 4. Dokumenty nemeckej proveniencie. 1939–1945.* [Holocaust in Slovakia 4. The Documents of German Origins. (1939–1945).]

(82) Johan Ickx (Autore), Rosa Prencipe (Traduttore), Caterina Chiappa (Traduttore), Monica Pezzella (Traduttore), *Pio XII e gli ebrei. L'archivista del Vaticano rivela finalmente il ruolo di papa Pacelli durante la Seconda guerra mondiale*, Milano: Rizzoli Editore S.p.A., 2021. [タイトル中の“papa Pacelli”はピウス12世(Pio XII)のこと。教皇に就任する前の名がEugenio Maria Giuseppe Giovanni Pacelli]

(78) Ivan Kamenec, Vilém Prečan and Stanislav Škorvánek, (eds.), *Vatikán a Slovenská republika /1939–1945/. Dokumenty*, [Vatican and Slovak Republic /1939–1945/. Documents,] Bratislava: SAP, 1992.

する文書を著し、バチカンの歴史学者ヨハン・イクスを批判した⁽⁸³⁾。イクスに反論しようとした彼らはスロバキア国務院の役割と立場に注目し、ヴォイタシュチャークが議員であった国務院の重要性を低め、国務院副議長の職責にあった者としての発言を軽く扱おうとした。たとえば、1942年3月26日の国務院における発言をあえて分析することはせず、ヴォイタシュチャークの発言の中から、自分たちに好都合なものだけを選び抜き、アーリア化とか、アレクサンデル・レーリンクが迫害を受けたときに司教がどんな役割を演じたかについては口をつぐんだというのが実相である。ヴォイタシュチャークの列福を促進するために、イクスの著書をけなそうとしたと我々は見ている。イクスの著書の中に見られる誤まった記述や不正確な記述に対する彼らの議論が実際に重要であるということは、公正を期すべく指摘しておかなければなるまい。とは言え、彼らは一貫して、ヴォイタシュチャークの発言や行動には反ユダヤ的感情(ユダヤ人への嫌悪感情)が通底していることを認めず、またその是非を議論することもしていない。

ヴォイタシュチャークに関しては、その列福だけが問題になるのではない。本件は、社会が宗教と政治の関係(この場合にはホロコーストに連なる反ユダヤ主義政策)を理解するときの窓である。スロバキア共和国(1939年～1945年)の政治の中で立ち回ったカトリック聖職者には、当時の状況や出来事

に対して共同責任がある。国務院の副議長としての司教ヴォイタシュチャークは、確かにその中のひとりである。スロバキアの教会がかかる人物を擁護するということは、全体主義体制とその指導者の名誉を回復しようとするのだと考えられる。

2002年には、スロバキア共和国とローマ教皇庁が国民の祝日などに関する規程について協定を締結した。このことから、ヴォイタシュチャークの事例が重要であることは、さらに強調することができよう。この協定では、「スロバキア共和国国民によるカトリック教会への貢献」を互いに認めあうと謳われている⁽⁸⁴⁾。

スロバキアを訪問した教皇フランシスコ1世は次のように述べた。

この地スロバキアにあって、悲劇的で筆舌に尽くしがたい対立の矢面に立たされたユダヤ民族の歴史に思いを馳せるとき、気恥ずかしい思いがします。幾たび……主の御名が人道にもとる筆舌に尽くしがたい行為のときに用いられたことでしょうか。一体どれだけの人たちが「神は我とともにあり」と口にしたことでしょうか。しかし、そのような人たちは神とともにはいなかったのです⁽⁸⁵⁾。

であることによる。“archivista”は「公文書館員」, そのまま「アルキヴィスタ」とも。]

(83) この文書の署名人は以下のとおり [脚注 76 参照]。モンシニョール・ヤーン・クボシュ (スピシュ管区長), ニトラ修道院司教ヴィリアム・ユダーク, モンシニョール・キリル・ヴァシツ (コシチェウ司教区司教), ペーテル・ユチャガ (神の僕ヤーン・ヴォイタシュシェク司教列福の大義の調査請願者)。

(84) スロバキア共和国とローマ教皇庁との協定 (Základná Zmluva medzi Svätou stolicou a Slovenskou republikou [Basic Treaty between the Holy See and the Slovak Republic]) については以下を参照。http://spcp.prf.cuni.cz/dokument/kon-sr.htm, accessed in October 2021.

(85) 教皇フランシスコ1世の声明については以下を参照。„Prihovor pápeža Františka pri stretnutí so židovskou komunitou“, [“Pope Francis’ Address at the Meeting with the Jewish Community,”] https://www.kbs.sk/obsah/sekcia/h/dokumenty-a-vyhlasenia/p/dokumentypapezov/c/sk2021-prihovor-papeza-frantiska-pri-stretnuti-so-zidovskou-komunitou, accessed in October 2021.

教皇は、ティソやヴォイタシュシャークなどの政治的に関与したカトリック司祭の名前を具体的に出しはしなかった。今後バチカンが列福手続きについて何らかの決定を下せば、現在と未来のスロバキア国民がこのような論争の的になった人物の行状をどのように受け止めればよいかを示すだけでなく、高い立場にいるカトリック聖職者による評価をどのように受け止めればよいかをも示すことになるであろう。

3. 結 語

共産主義体制が崩壊した後、歴史学は新たに見出した自由を謳歌して、スロバキアの歴史の空白を埋め始めた。具体的に言えば、反ユダヤ主義やホロコーストというような、これまでは疎んじられていたテーマを取り上げるようになった。特にチェコスロバキアが解消されたことによって、デュリカやヴヌクに代表されるナショナリズム志向の歴史学が素早く根を下ろした。その結果、戦時下のスロバキア共和国（1939年～1945年）を取り扱う歴史学の方法論は二つに分かれた。その後、ナショナリズム聖職者の物語が政治目的でも利用されることが明らかになった。本稿第2節で取り上げた3つの事例は、歴史上のエピソードについての解釈が多様でありうることを示している。当然ながら、そのことは、かくも歪んだ歴史観を市民社会の規範にしないようにするにはどうすればよいかということも示している。1990年代の歴史修正主義による危うい干渉は、ECの支援を受けてからくも阻止された。

F. デュルチャンスキーの顕彰碑の場合は、反ユダヤ政策への関与が明確な人物の顕彰を地域が決定してしまえば、市民運動が何と言おうと科学機関が見解を述べようと、それを

阻止できず、政府でさえも手が出せないことを明らかにした。これと似たような事態の再発を防止するには、法改正により、地域で活動する政治家とか地域政策の意思決定者が、あのような仕方で国民の記憶に割り込んできたり、度を超えた政治運動のためのシンボル（あるいは顕彰の場）を作ったりすることをできなくさせることであろう。

司教ヴォイタシュシャークの事例は、歴史学がどれだけカトリックの高位聖職者の見解と重なっているか、あるいは対立しているかを明らかにしている。この問題が生じたのは、戦時下のスロバキア共和国当局に対して、そしてまたカトリック聖職者ヨゼフ・ティソが領導した全体主義体制に対しても、これまで教会が非難してこなかったからだ我々は見ている。一再ならず教会は反ユダヤ主義とホロコーストに対しては距離を置いてきたのに、ティソ政権に対してはそうではなかった。最近のカトリック高位聖職者の発言を見ると、教会にはあの司教についての列福手続きを止めようとする意気込みが見られない。本件について言えば、[歴史に果たした] ヴォイタシュシャークの役割をめぐる論争が、少なくとも形式的にはとても宗教色の強い（圧倒的大多数がカトリック教徒の）スロバキア国民の琴線に、どの程度まで触れたかということ、時間が経たなければ分からないであろう。

本稿で取り上げた3つの事例から分かるように、20世紀についての歴史解釈に対するスロバキアの格闘は、市民社会を作り上げるための奮闘と同様に、今後とも続くであろう。戦時中のスロバキア共和国を復興させようとする勢力は、いまだにスロバキアに隠然として残っている反ユダヤ主義を奉じている。反ユダヤ主義との闘いがあるところ、歴史学もまたどちらかの側に立っている。

参 考 文 献

- ADAP Serie E, Tom 1, p. 272 (Document No. 150)
- “Act No. 338/2020 Coll. of 4 November 2020 amending Act No. 125/1996 Coll. on the immorality and illegality of the communist system and amending and supplementing certain acts,” <https://www.slov-lex.sk/pravne-predpisy/SK/ZZ/2020/338>. Accessed in May 2022.
- Actes and Documents du Saint Siège relatifs à la Seconde Guerre Mondiale*, Ed. P. Blet, R. A. Graham, A. Martini, B. Schneider, I–XI, Città del Vaticano, 1970–1981.
- “An Expert Opinion of the Institute of History of the Slovak Academy of Sciences on Ferdinand Ďurčanský,” Website of The Institute of History, Slovak Academic of Sciences: <http://www.history.sav.sk/index.php?id=durcansky>, accessed October 2021.
- “An Expert Opinion of the Nation’s Memory Institute,” Website of the Nation’s Memory Institute: <https://www.upn.gov.sk/data/pdf/historicke-hodnotenie-FD.pdf>, accessed October 2021.
- Baka, Igor, *Židovský tábor v Novákoch 1941–1944*, [The Jewish Camp in Novák 1941–1944,] Bratislava, 2001.
- Baranovič, Štefan, (ed.), *Ferdinand Ďurčanský (1906–1974). Zborník zo seminára o Dr. Ferdinandovi Ďurčanskom, ktorý sa konal pri príležitosti jeho nedožitých deväťdesiatych narodenín v Rajci 8.12.1996*, [The Yearbook from Seminar about Dr. Ferdinand Ďurčanský, which was held on the occasion of his not live ninetieth birthday in Rajec on December 8, 1996,] Martin: Matica Slovenská, 1998.
- Brandmüller, Walter, *Holocaust in der Slowakei und die katholische Kirche*, [The Holocaust in Slovakia and the Catholic Church,] Ph. C. M. Schmidt, 2003.
- Büchler, R.Y., “Jewish Community in Slovakia before the World War II,” in: *Tragedy of the Slovak Jewry*, Banská Bystrica: Múzeum SNP, 1992, pp. 5–26.
- Dreyfus, Jean-Marc and Nižňanský, Eduard, “Jews and non-Jews in the Aryanization Process Comparison of France and the Slovak State, 1939–1945,” in: *Facing the catastrophe: Jews and non-Jews in Europe during World War II*, Oxford: Berg, 2011, pp. 13–39.
- Dvorník, Francis, *Byzantine Mission among the Slavs: SS. Constantine-Cyril and Methodius*, New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1970.
- „Ďurčanského sochu zatiaľ neodstránia. Mesto chce stanovisko od historikov“, [“The Monument of Ferdinand Ďurčanský will be not removed yet. The City wants an expert Opinion from Historians,”] *Denník Sme*, February 24, 2011, <https://myzilina.sme.sk/c/5781369/durcanskeho-sochu-zatialneodstrania-mesto-chce-stanovisko-od-historikov.html>, accessed October 2021.
- Ďurica, Milan S., *Jozef Tiso (1887–1947), Životopisný profil*, [Jozef Tiso (1887–1947), a Biographical Profile,] Bratislava, 2006.
- Ďurica, Milan S., *Dejiny Slovenska a Slovákov*, [The History of Slovakia and Slovaks,] Bratislava: Slovenské pedagogické nakladateľstvo, 1995.
- Ďurica, Milan S., *Slovenský podiel na európskej tragédii Židov*, Koeln: Slovensky ustav M. Cernaka, 1987.
- Fabricsius, Miroslav and Suško, Ladislav (eds.), *Jozef Tiso: Prejavy a články 1913–1938*, [Jozef Tiso: Speeches and Articles 1913–1938,] Bratislava: Historický ústav SAV, 2002.
- Fabricsius, Miroslav and Hradská, Katarína (eds.), *Jozef Tiso: Prejavy a články 1939–1944*, [Jozef Tiso:

- Speeches and Articles 1939–1944,] Bratislava: AEPress, 2007.
- Gardista*, February 9, 1943.
- Hlavinka, Ján, Kamenec, Ivan and Clifford, Martin, *The Burden of the Past, Catholic Bishop Ján Vojtaššák and the Regime in Slovakia (1918–1945)*, Bratislava: Dokumentačné stredisko holokaustu, 2014.
- Hlavinka, Ján and Nižňanský, Eduard, *Pracovný a koncentračný tábor v Sereďi 1941–1945*, [The Labor and Concentration Camp in Sereď 1941–1945,] Bratislava, 2009.
- Hausleitner, Mariana, Hazan, Souzana und Hutzelmänn, Barbara, (Hg.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945*, Band 13: Slowakei, Rumänien und Bulgarien, Berlin/Boston: Walter de Gruyter GmbH, 2018.
- Hilberg, Raul, *Perpetrators, Victims, Bystanders: The Jewish Catastrophe, 1933–1945*, New York: Harper Collins, 1992.
- Hilberg, Raul, *The Destruction of the European Jewry*, 3rd Edition, New Haven: Yale University Press, 2003. (望田幸男, 原田一美, 井上茂子 (訳) 『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(全2巻), 柏書房, 1997年。)
- Hrabovická, Hilda, *Ruka s vytetovaným číslom*, [Hand with a Tattooed Number,] Bratislava, 1998.
- Hradská, Katarína, “The Status of Jews in Slovakia under the 1st Czechoslovak Republic,” in: *Emancipation of Jews — Anti-Semitism — Persecution in Germany, Austria-Hungary, in Czech Countries and in Slovakia*, Bratislava 1999, pp. 131–38.
- Hradská, Katarína, *Prípady Wisliceny. Nacistickí poradcovia a židovská otázka na Slovensku*, [The Wisliceny Case: Nazi Advisors and the Jewish Question in Slovakia,] Bratislava: AEPress, 1999.
- Kamenec, Ivan, „Štátna rada v politickom systéme Slovenského štátu v rokoch 1939–1945“, [“The State Council in Political System of the Slovak State in 1939 to 1945,”] *Historický časopis*. 44, 1996, pp. 221–242.
- Kamenec, Ivan, *Jozef Tiso: Tragédia politika, kňaza a človeka*, [Jozef Tiso: The Tragedy of a Politician, Priest and Man,] Bratislava: Premedia 2013.
- Kamenec, Ivan, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991.
- Kamenec, Ivan, *On the Trail of Tragedy: The Holocaust in Slovakia*, Bratislava: Hajko & Hajková, 2007. (Englische Übersetzung von Kamenec (1991).)
- Kamenec, Ivan, “The Escape of Rudolf Vrba and Alfréd Wetzler from Auschwitz and the Fate of Their Report,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák, (eds.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and their Efforts to Inform the World on Genocide — Odhaľovanie Šoa: odpor a úsilie Židov informovať svet o genocíde*. Bratislava: HÚ SAV, 2016, pp. 101–112. (カメネツ「ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号, 2022年9月。)
- Kamenec, Ivan, Prečan, Vilém and Škorvánek, Stanislav, *Vatikán a Slovenská republika (1939–1945). Dokumenty*, [Vatican and Slovak Republic 1939–1945. Documents,] Bratislava: SAP, 1992.
- Kern, Miroslav, „Sociológ Vašečka o 70 rokoch od nástupu komunizmu: Chýba nám tu múzeum totality“, [“The Sociologist Vašečka about 70 Years since Onset of Communism: We lack the Museum of Totalitarianism,”] *Denník N*, February 23, 2018, <https://dennikn.sk/1034803/sociolog-vasecka-o-70-rokoch-od-nastupu-komunizmu-chyba-nam-tu-muzeum-totality/>, accessed in October 2021.

- „Kolektív Historického ústavu SAV, Stanovisko ku knihe M. S. Ďuricu: Dejiny Slovenska a Slovákov“, [“Expert opinion on the book by M. S. Ďurica: History of Slovakia and Slovaks,”] *Studia historica Nitriensia* 5, 1996, pp. 285–291.
- Lipscher, Ladislav, *Die Juden im Slowakischen Staat, 1939–1945*, München: R. Oldenbourg, 1980.
- Lipscher, Ladislav, *Židia v slovenskom štáte, 1939–1945*, [Jews in the Slovak State, 1939–1945,] Print-servis, 1992.
- Mesežnikov, Grigorij, „Prezentácia vzťahu Európska únia — Slovensko hlavnými politickými aktérmi“, [“Presentation of the European Union — Slovakia Relations by the Main Political Actors,”] *Medzinárodné otázky* 8, 1999, pp. 17–51.
- Moravcsik, Gyula, *Constantine Porphyrogenitus: De Administrando Imperio* (2nd revised ed.), Washington D.C., Dumbarton Oaks: Center for Byzantine Studies, 1967.
- Nešťáková, Denisa and Nižňanský, Eduard, “Swedish Interventions in the Tragedy of the Jews of Slovakia,” in: *Nordisk judaistik*, Vol. 27, No. 2, 2016, pp. 22–39.
- Nešťáková, Denisa and Nižňanský Eduard, “Regulating of Sexual Relations between Jews and non-Jews by Ordinance Number 198/1941 Coll. of Slovak laws in times of the Slovak State,” in: *Women and World War II. Judaica et Holocaustica* 7, Bratislava: Stimul, 2016, pp. 89–118.
- New York Times*, November 6, 1938.
- Nižňanský, Eduard, „Der Holocaust in der Slowakei in der slowakischen Historiographie der neunziger Jahre“, in: *Bohemia*, Vol. 44, 2003, pp. 370–388.
- Nižňanský, Eduard and Jakobyová, Barbora, „Lokálni aktéri počas holokaustu. Prípady dvoch katolíckych kňazov z Dolného Kubína: Ignác Grebač-Orlov a Viktor Trstenský“, [“The local actors during the holocaust. The case of two Catholics priests from Dolný Kubín: Ignác Grebač-Orlov and Viktor Trstenský,”] in: *Historik a dejiny: v československom storočí osudových dátumov*, Bratislava: Veda, 2018, pp. 59–86.
- Nižňanský, Eduard, *Politika antisemitizmu a holokaust na Slovensku 1938–1945*, [Slovak Politics of anti-Semitism and the Holocaust in Slovakia 1938–1945,] Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2016.
- Nižňanský, Eduard, „Die Vorstellungen Jozef Tiso über Religion, Volk und Staat und ihre Folgen für seine Politik während des Zweiten Weltkriegs“, in: Kristina Kaiserová *et al.* eds. *Religion und Nation: Tschechien, Deutsche und Slowaken im 20. Jahrhundert*, Essen: Klartext, 2015, pp. 39–83.
- Nižňanský, Eduard, “Anti-Semitic Policies of Jozef Tiso during the War and before the National Court,” in: Stanislav Mičev *et al.* eds., *Policy of Anti-Semitism and Holocaust in Post-War Retribution Trials in European States*, Banská Bystrica: Múzeum SNP, 2019, pp. 113–148.
- Nižňanský, Eduard, „Die Machtübernahme von Hlinkas Slowakischer Volkspartei in der Slowakei im Jahre 1938/39 mit einem Vergleich zur nationalsozialistischen Machtergreifung 1933/34 in Deutschland“, in: Monika Glettler *et al.* eds., *Geteilt, besetzt, beherrscht*, Essen: Klartext Verl., 2004, pp. 249–287.
- Nižňanský, Eduard, “Expropriation and Deportation of Jews in Slovakia,” in: *Facing the Nazi Genocide: non-Jews and Jews in Europe*, Berlin: Metropol, 2004, pp. 205–230.
- Nižňanský, Eduard, “On Relation between the Slovak Majority and Jewish Minority during the World War II,” in: *Yad Vashem Studies*, Vol. 42, No. 2, 2014, pp. 47–89.
- Nižňanský, Eduard, „Die ‚Arisierung‘ jüdischen Vermögens in der Slowakischen Republik“, in:

- Eigentumsregime und Eigentumskonflikte im 20. Jahrhundert: Deutschland und die Tschechoslowakei im internationalen Kontext*, Essen: Klartext Verlag, 2018, pp. 373–412.
- Nižňanský, Eduard, „Die jüdische Gemeinde in der Slowakei 1938/39“, in: *Jahrbuch 2000*, Wien: DÖW, 2000, pp. 116–133.
- Nižňanský, Eduard, „Die Deportation der Juden in der Zeit der autonomen Slowakei im November 1938“, in: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 7, Frankfurt/Main: Campus, 1998, pp. 20–45.
- Nižňanský, Eduard, „Die Aktion Nisko, das Lager Sosnowiec (Oberschlesien) und die Anfänge des ‚Judenlagers‘ in Vyhne (Slowakei)“, in: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 11, Berlin: Metropol, 2002, pp. 325–335.
- Nižňanský, Eduard, “Payment for the Deportations of Jews from Slovakia in 1942,” in: *Discourses diskurse*, Praha, 2008, pp. 317–331.
- Nižňanský, Eduard, “The Discussions of Nazi Germany on the Deportation of Jews in 1942 — the Examples of Slovakia, Rumania and Hungary,” in: *Historický časopis*, No. 59, 2011, pp. 111–136. (ニジニャンスキー「1942年におけるユダヤ人強制移送にかんするドイツの外交交渉——スロバキア、ルーマニア、ハンガリーを例にして——」(木村和範訳)『学園論集』(北海学園大学)第189・190合併号, 2023年3月。)
- Nižňanský, Eduard et al. (eds.), *Slowakisch-deutsche Beziehungen 1938–1941 in Dokumenten I. Von München bis zum Krieg gegen die UdSSR*, Prešov: Universum, 2009.
- Nižňanský, Eduard, „Der Holocaust und die Slowakei“, in: Lotte Weiss, *Meine zwei Leben*, Berlin: LIT, 2010, pp. 173–194.
- Nižňanský, Eduard, “The History of the Escape of Arnošt Rosin and Czesław Mordowicz from the Auschwitz-Birkenau Concentration Camp to Slovakia in 1944,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák, (eds.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and their Efforts to Inform the World on Genocide — Odhaľovanie Šoa: odpor a úsilie Židov informovať svet o genocide*, Bratislava: HÚ SAV, 2016, pp. 113–134. (ニジニャンスキー「1944年にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所からスロバキアへ脱走したアルノシュト・ロジンとチェスワフ・モルドヴィッツの歴史」(木村和範訳)『経済論集』(北海学園大学), 第70巻第2号, 2022年9月。)
- Nižňanský, Eduard and Kamenec, Ivan, (eds.), *Holokaust na Slovensku 2. Prezident, vláda, Snem SR a Štátna rada o židovskej otázke (1939–1945). Dokumenty*, [Holocaust in Slovakia 2. President, government, parliament SR and State Council about Jewish question (1939–1945). Documents,] Bratislava: NMŠ, 2003.
- Nižňanský, Eduard (ed.), *Holokaust na Slovensku 4, Dokumenty nemeckej proveniencie. 1939–1945*, [Holocaust in Slovakia 4. The Documents of German origins. (1939–1945),] Bratislava: NMŠ, 2005.
- „Odhalenie busty Ďurčanského spustilo policajné vyšetrovanie“, [“The Unveiling of a Bust of Ferdinand Ďurčanský started a Police Investigation,”] *Denník Pravda*, June 14, 2011, <https://spravy.pravda.sk/regiony/clanok/210914-odhalenie-busty-durcanskeho-spustilo-policajnevysetrovanie/>, accessed in October 2021.
- Paulovicova, Nina, “The Unmasterable Past? Slovaks and the Holocaust: The Reception of the Holocaust in Post-communist Slovakia,” in: John-Paul Himka and Joanna Michlic, (eds.), *Bringing the Dark Past to Light. The Reception of the Holocaust in Post-Communist Europa*, Lincoln/London: University of

- Nebraska Press, 2013, pp. 549–590.
- Paulovicova, Nina, “Mapping the Historiography of the Holocaust in Slovakia in the Past Decade (2008–2018). Focus on the Analytical Category of Victims,” *Judica et Holocaustica*, Vol. 10, No 1, 2019, pp. 46–71.
- “Pope Francis’s statement,” Website of the Conference of Bishop of Slovakia: <https://www.kbs.sk/obsah/sekcia/h/dokumenty-a-vyhlasenia/p/dokumenty-papezov/c/sk2021prihovor-papeza-frantiska-pri-stretnuti-so-zidovskou-komunitou>, accessed in October 2021.
- Rothkirchen, Livia, “The Situation of Jews in Slovakia between 1939 and 1945,” in: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung*, Vol. 7, 1998, pp. 46–71.
- Slovak Law Code 1940, Constitutional Act No. 210/1940 Coll.
- Slovak Law Code 1941, Govt. Reg. 198/1941 Coll.
- Slovák*, February 7, 1939.
- Slovák*, June 6, 1939.
- Slovák*, September 9, 1940.
- Slovák*, September 25, 1940.
- Slovák*, August 18, 1942.
- Slovenská Politika*, January 27, 1939.
- Sniegón, Tomas, *Vanished History. The Holocaust in Czech and Slovak Historical Culture*, Berghahn Books, 2017.
- Schwalbová, Manca, *Vyhasnuté oči*, [Quiescent Eyes,] Bratislava, 1964.
- Szabó, Miloslav, “‘Clerical Fascism’? Catholicism and the Far-Right in the Central European Context (1918–1945),” *Historický časopis*, Vol. 66, 2018, pp. 885–900.
- Szabó, Miloslav, „Zwischen Geschichtswissenschaft und Wissenschaft. Der Holocaust in der slowakischen Historiographie nach 1999“, *Einsicht*, Vol. 11, 2014, pp. 16–23.
- Szabó, Miloslav, „*Klérofašisti. Slovenskí kňazi a pokušenie radikálnej politiky (1935–1945)*“, [“Clerofascists. Slovak Priests and the Temptation of Radical Politics,”] Bratislava: Slovart, 2019.
- “Slovakia. Population: Demographic Situation, Languages and Religions,” Website of the European Education and Culture Executive Agency: https://eacea.ec.europa.eu/national-policies/eurydice/content/population-demographic-situation-languages-and-religions-72_en, accessed in October 2021.
- Štefánek, Anton, *Základy sociografie Slovenska*, [Foundations of the Sociology of Slovakia,] Bratislava, 1944.
- Šústová Drelová, Agáta, „Čo znamená ‚národ‘ pre katolíkov na Slovensku?“ [“What does the ‘nation’ mean to Catholics in Slovakia?”] *Historický časopis*, Vol. 67, 2019, pp. 385–412.
- “The Answer given by Hans van der Broek in the European Parliament,” Website of the Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getAllAnswers.do?reference=E1997-2343&language=EN>, accessed in October 2021.
- “The Conclusions of Casablanca Conference,” in: *Encyclopedia Britannica*: <https://www.britanica.com/event/Casablanca-Conference>, accessed in October 2021.
- “The Constitution of the Slovak Republic,” Website of President of Slovak Republic: <https://www.prezide.nt.sk/upload-files/46422.pdf>, accessed in October 2021.

- “The Speech of the Pope John Paul II. in Slovakia,” Website of The Conference of Bishops of Slovakia: <https://www.kbs.sk/obsah/sekcia/h/dokumenty-a-vyhlasenia/p/dokumentypapezov/c/navsteva-svateho-otca-v-sr-1995>, accessed in October 2021.
- “The Statements by the Conference of Bishop of Slovakia,” Website of Conference of Bishop of Slovakia: <https://www.tkkbs.sk/view.php?cislocianku=20210913093>, accessed in October 2021.
- “The Statement by the Slovak Government,” Website of Slovak Government: <https://www.vlada.gov.sk//vyhlasenie-vlady-sr-k-umiestneniu-busty-f-durcanskeho-v-rajci/>, accessed in October 2021.
- “The Summary from the Meeting of the Municipal Council in Rajec, held on 19 May 2011,” Website of Slovak Municipal Rajec: <http://www.rajec.info/files/16995-ZAPIS20110609.pdf>, accessed in October 2021.
- “The Treaty between the Slovak Republic and the Holy See,” <http://spcp.prf.cuni.cz/dokument/konsr.htm>, accessed in October 2021.
- “The written Questions by Hedy d’Ancona in the European Parliament,” Website of the Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?pubRef=-//EP//TEXT+WQ+E-1997-2343+0+DOC+XML+V0//EN>, accessed in October 2021.
- “The written Questions by Leonie van Bladel in the European Parliament,” Website of the Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?type=WQ&reference=E-1997-2469&language=EN>, accessed in October 2021.
- “The written Questions by Otto Bardong in the European Parliament,” Website of the Members of the European Parliament: <https://www.europarl.europa.eu/sides/getDoc.do?pubRef=-//EP//TEXT+WQ+E-1997-2644+0+DOC+XML+V0//EN>, accessed in October 2021.
- Úradné noviny*, September 9, 1941.
- Vnuk, František, *Mat’ svoj štát znamená život*, [Having own state means life,] Bratislava, 1991.
- Vrba, Rudolf, *I Cannot Forgive*, Vancouver, 1997.
- Ward, James Mace, *Priest, Politician, Collaborator: Jozef Tiso and the Making of Fascist Slovakia*, Ithaca and London: Cornell University Press, 2013.
- Wetzler, Alfréd, [as Lánik, J.,] *Čo Dante nevidel*, [What Dante Did Not See,] Bratislava, 1964.

